

東亜同文書院記念基金会ニュース

第20号

2018年4月～2019年3月



Contents

第25回 東亜同文書院記念基金会授賞式	—02
東亜同文書院記念基金特別奨励賞・荣誉賞授与 参列者、アーカイブズを語る	—14
本間先生欽慕の会・根津山洲先生墓参・荒尾東方斎先生墓参	—15
東亜同文書院大学記念センター活動レポート	—37
	—39

発行／愛知大学東亜同文書院大学記念センター

第25回東亜同文書院記念基金会授賞式

第25回東亜同文書院記念基金会授賞式が2019年3月6日、霞山会館にて催されました。

この顕彰事業は、東亜同文書院記念基金会によるものであり、その目的は、東亜同文書院およびその経営母体であった東亜同文会にかかわる研究や調査成果、および啓蒙的活動のうち、顕著な実績を認められた個人、団体や組織を顕彰するものです。東亜同文書院記念基金会を構成する滬友会（書院同窓会。2007年解散）、霞山会、愛知大学東亜同文書院大学記念センターからの推薦により同理事会において選出しており、1993年の第1回表彰以来、本年度で第25回目となります。

これまで、書院生の大旅行に関する研究成果や東亜同文会の資料に基づく研究、東亜同文書院や東亜同文会の出版物のデータベース化事業、東亜同文書院生や卒業生による日中交流に関するメディア報道、その他日中交流の活発な活動などの成果に対して顕彰してまいりました。

第25回となる今回は、功労賞として中島寛司氏が選ばれました。

〔功労賞受賞者〕

中島 寛司 氏

中島寛司氏は、1954（昭和29）年に愛知大学へ入学。音響メーカー退職後は愛知大学同窓会神奈川支部事務局長、神奈川支部長などを歴任し、現在は本部広報委員として同窓生ほか関係者への情報発信に尽力されている。これまで長きにわたり同窓会のリーダーとして滬友会、霞山会、愛知大学が開催する多岐にわたる行事にかかわりを持たれ、東亜同文書院卒業生と愛知大学関係者とのつなぎ役を担われている。その行動力は第一人者といえる功績である。遡れば、東亜同文書院卒業生の滬友会による「東亜同文書院記念基金会」設立にも尽力をなされた。1990（平成2）年12月に書院41期の高遠三郎氏が滬友会へ提案され、小崎昌業氏ほか40期代の方々に中島氏が加わり積極的な協力活動がなされた結果、1億円が集まり、それに霞山会と愛知大学で5千万円ずつ出資して2億円の基金が誕生した。東亜同文書院記念基金会の産みのファミリーであり、基金事業展開への大きな功績者である。

〔授賞式挨拶〕

川井 伸一 氏

（東亜同文書院記念基金会会長・愛知大学学長）

皆様、おはようございます。基金会の会長を務めております愛知大学学長の川井でございます。今日は愛知大学の同窓会と関係が極めて深い中島寛司様が東亜同文書院記念基金会の功労賞を受賞されたということで改めてお祝いを申し上げます。中島さんのご功績については後でまた詳しい説明があるかと思いますが、そちらに譲りいたしますので、この間10年以上にわたるお付き合いの中での中島寛司さんへの印象をいくつか紹介させていただきますと思います。中島さんは知的好奇心がとても旺盛で勉強心も強く、且つまた東亜同文書院関係を中心とした色々なイベントに足繁く通われるなどフットワークの大変軽い方でいらつしやるにつくづく感じていた次第でございます。関連のイベントは多々あります。この東亜同文書院記念基金会だけではなく、愛知大学の東亜同文書院大学記念センター主催の色々な催し物、講演会や展示会、それから霞

山会主催の色々なイベントです。愛知大学の同窓会、ないしはこれまでの東亜同文書院の同窓会である滬友会との様々なお付き合いをされてきたと聞いております。深く敬意を表したいと思います。もう一つ私が常々感じておりますのは、中島さんは人のお世話をするのがとても好きな方なのではないだろうかと思えます。これは第一点と関係がございしますが、単に個人的に出席するということだけではなく人との繋がりや広報を絶えず意識して活動されているということでございます。例えば、イベントがあれば事前に関係者に「何月何日にこういうイベントがありますよ。」というようなメールを、私にもたびたび送ってくださいます。また、出席された後の感想なども時々私は伺っております。またイベントの度に写真を撮られており、写真を時々いただいたこともございます。そういうことだけではなく、やはり先ほどの賞状の文面にもありましたように、東亜同文書院記念基金会の設立にあたって色々な関係者との調整に献身され活躍していただいたことをはじめ、愛知大学の関係者、霞山会の関係者様等々、色々な方々との交流を積極的に行われて、それを広く周りにアピールされているというところがございます。さらにそういう活動の基礎には、中島さんには歴史上の東亜同文書院という大学、その後継としての愛知大学、霞山会等々、関連の団体やその活動に対

する深い愛着をお持ちなのではないかと思っております。そういうことでございまして、これまでのご活躍、ご活動はこの基金会の功労賞に十分値すると思っております。ところでございます。改めて申すまでもないのですが、どうでございます。以上をもちまして私の簡単なご挨拶とさせていただきます。



〔功労賞祝辞〕

池田 維 氏(霞山会理事長)

皆様、おはようございます。ただ今ご紹介いただきました霞山会理事長の池田と申します。本日は基金会功労賞の受賞という事で、中島寛司さんが受賞されることになりました。心からお祝いを申し上げたいと思えます。これまでも霞山会としましては中島さんから色々なご協力、ご支援をいただいております。そういった意味でこの基金会の功労賞

をお受けになられたということは中島さんのこれまでの功労に對しまして非常にふさわしい賞ではないかというように私は感じております。改めて申すまでもないのですが、霞山会の前身が東亜同文会でありまして、東亜同文会が中国で作った高等教育機関の東亜同文書院。そしてそれを引き継がれた愛知大学という歴史的な繋がりを考えますと、愛知大学と霞山会というのは兄弟同士のような関係ではないかと思えます。年と共に記憶が薄れていくということはあるかもしれませんが、しかし、その伝統の繋がりといたしましては非常にしっかりとしたものがあります。とを、私も霞山会に来てから強く感じております。中島さんはそういった中では東亜同文書院の基金会の仕事だけではなく、霞山会が関係しております墓参会や講演会、シンポジウムなど、そういった集まりには欠かさず出席なされて、その時には知り合いの人や関係者に対しても「霞山会でこういう催しをやるから。」というお話を伝えていただいているということ、先ほど川井学長がおっしゃっておられたような本当に人の繋がりを大事にされる方でございます。これは貴重なことだと思えます。霞山会の諸活動は中島さんのご支援、ご協力を得ながら多くの方々が参加されるといような格好で行われており、私も中島さんに感謝を申し上げたいと思えます。詳しくは申しませんが、6月に愛知大学の名古屋キャンパスをお借りし

て霞山会と愛知大学の共同シンポジウムを行おうということが最近決まりました。積極的なご支援があったということもあります。そういう場を作って、霞山会と愛知大学の間の関係というものを強化していきたいと考えております。中島さん、本日は受賞おめでとうございました。



〔功労賞推薦の辞〕

藤田 佳久 氏

(東亜同文書院記念基金会理事・
愛知大学名誉教授)

皆さん、こんにちには。東亜同文書院大学記念センターの藤田です。第25回、東亜同文書院記念基金会受賞者中島様の推薦状を、少し長いのですが読ませていただきます。この2月に10年ぶりに風邪をひきまして、低温と乾燥でやられてしまい、ここまで声が戻ってき

たところですが、まだまだお聞き苦しいかと思えますがよろしくお願い致します。

中島寛司様は昭和11年、長野県下伊那郡下條村でお生まれになりました。「愛知大学は上海にあった東亜同文書院のルーツ校だから偉い先生たちがいる。」と高校の先生から勧められて昭和29年、愛知大学へご入学されました。ご卒業後はある音響メーカーに就職されました。東京、大阪、広島等でご勤務されました。現在は横浜に昭和48年以来、お住まいになっておられます。その後、愛知大学同窓会では神奈川支部事務局長、神奈川支部長等を歴任され、現在は本部の愛大同窓会広報委員で活躍中でございます。これまで長きにわたり滬友会、霞山会、愛知大学等の多岐にわたる様々な行事にお関わりになられまして、先ほどのお二方のお話にもありましたように顔を頻繁に出され、繋ぎ役として大きく貢献されました。このような多岐にわたる諸活動を若干ご紹介させていただいて推薦をさせていただきます。

中島寛司様が関わられた色々な活動を若干まとめてご紹介をさせていただきます。まず、何といたっても一つは東亜同文書院記念基金会、設立への貢献。記念基金会の設立については書院第41期生の高遠様。残念ながら今年亡くなられてしまわれましたが、そして平成2年12月に40期の方々が集いまして、まだ書院卒業生に活力のあるうちに書院勉強の精神に沿った人材育成に寄与する会を作

りたいと滬友会に提案されました。紆余曲折色々ございましたけれども、それがまとまって本日このようなかたちになったわけです。特に書院の卒業生からは1億円の寄付が集まりました。それに霞山会と愛知大学で各5千万円ずつ出しあつて2億円の基金が誕生したわけです。この紆余曲折の際には、中島様は色々な人脈等の中で色々な方々と相談をし合つて基金会の設立に非常に大きく貢献されたわけです。こうして高遠様や小崎様、書院の卒業生の方々ですが、40期生の方々が中心になられて設立されたということです。先ほどもお声がありましたように、中島様ご自身も滬友会の方々と同じように基金を提供されています。そういう意味で記念基金会の設立には多大な貢献をなされました。これがまず大きな点です。

次は荒尾精、根津一、近衛篤麿、最後の院長であつて、愛知大学の学長にもなられた本間喜一。いわゆる先覚の方々の方々の墓参会を実施されました。その運営を非常に努力されたという点であります。前々回、村上様の授賞式がございました。この墓参会の活動は戦後、上海から帰国された村上親子（お父さんが書院の先生です）のご尽力により、上海時代の御神体を埼玉のお住まいである靖亜神社に引き受け、近衛篤麿、荒尾精、根津一の三聖人を祀る春季大祭、秋季の霊祭を行うようになり、東亜同文書院同窓会である滬友会の方々の参加も始まりました。元総理大臣の吉田

茂や中曾根康弘、ほか書院を理解する政界人の方もよく参加されました。中島様は平成になってから毎年参加されておられました。しかしその後、滬友会が解散され、その後、主催されていた42期の倉田様は、横浜にお住まいの非常に元気な方でしたけれども、亡くなられてしまいました。その後、その運営を中島様が担当された他、10月には谷中の全生庵で荒尾精、4月には横浜の総持寺で根津一の墓参会の開催を中心になってやってこられました。毎年5月9日は愛知大学を創られました。しかも書院の最後の学長でありました本間喜一学長の命日です。この墓参会も中島様が書院卒業生と愛大卒業生をうまくつなぎ、積極的に運営されています。

次は寮歌祭での貢献であります。今、全国寮歌祭に愛知大学が参加しているのですが、これは昭和62年、1987年に初参加であります。これについては本間学長が「愛大は旧制大学の予科があったのだから参加する権利がある。」ということをお勧めにならちにお話しされ、参加するようにお勧めになったということがあります。今年で26回目、全部で56校が参加されています。ところで、旧制高校は学校がなくなつてしまったため後輩がいなくなった中、愛大には後輩がいる。現在では寮歌祭の中心的サポートは愛知大学が支えています。その中で中島様はそれも積極的に運営されてこられました。寮歌祭にしましては、愛大の卒業

生も一緒に活躍されています。

次は現代中国学部 of 中国現地調査報告会へのサポートです。愛知大学にできました現代中国学部は書院生が行った大調査旅行的な現地調査を行っております。第2回目的の北京では愛大卒業生他、滬友会のメンバーもたくさん参加されました。回を重ねるごとに報告会の参加者も増え、会後の中国旅行も行われてきました。その企画調整等にも中島様は非常に多大な貢献をなされました。

また、近衛通隆氏と滬友会、愛大卒業生のメンバーでゴルフ大会、これも非常に大きな行事でありました。滬友ゴルフ会は、平成2年茨城県の勝田、今は地名が合併でなくなつてしまいましたが、そのゴルフクラブで45名ほどが参加し、春秋の年2回開催され、中島様はこれに積極的に参加され、滬友会と愛大卒業生、近衛通隆様も含めてこの会を支えてこられました。北京での国際ゴルフ大会へも出席されて1回目は42期生の石川様が中心でした。中島様もご参加。2回目は近衛通隆様が会長になり参加されています。42期生の小崎様は今日はお見えになつておられないですけれども、秘書長の役割を果たされ、中島様も積極的に参加をされました。近衛様は毎年数回、豊橋へ愛大の卒業生との懇親を図るためにも来られました。ゴルフをされました。私はゴルフをやらないので懇親会だけ出させてもらったことがございます。

中島様は以上のように様々な行事に積極

的に参加され、その際、必ず行事の模様を写真で撮られまして、先ほど学長が言われたように通知はもちろんですけれどもアフターケアも完璧でありまして、皆様方へ写真を送っていたできてきました。これも随分お金もかかるのではないかと思うのです。そういう大変なご尽力もいただいております。その他、霞山会の墓参会、特に書院の卒業生の方が少なくなる中で書院の卒業生の人たちとこの建物の食堂で昼食会をされて、書院の方々と非常に緊密に積極的な交流をされ今もアタックされています。「僕は愛大の教育力向上に貢献したい」と。先ほど川井学長がおっしゃった通りでありますけども。そういうことで愛知大学にもよく来られて教職員と愛大の活性化はどうあるべきか、というお話を機会があることに話されてまいりました。そういう情報交換の中で、外から見た目で愛大へ色々なことをおっしゃるところは



母校愛の強さがあふれています。その他には本間先生の故郷の山形県川西町や御出身の南信州地域の振興のあり方まで幅広いご関心を持っておられ、諸活動を積極的に運営、推進されてきました。

中島寛司様は今回の東亜同文書院記念基金会の功労賞に十分に資格があるというところで推薦をさせていただきました。今後ともご健康に留意されて、今後もこの会へもご尽力をいただきますよう心からお願ひ申し上げたく存じます。本日は受賞、大変おめでとうございます。

〔受賞挨拶〕

中島 寛司 氏

川井学長、池田理事長、藤田先生から過分な紹介をいただきまして本当に恐縮しております。私の身に余るお褒めというか紹介をしていただいで本当に感激をしております。私からは推薦に至った経過であるとか、同文書院の皆さんから色々と学んだことのお話をしながら将来に対して私がどうありたいとか、オーバーに言えば世界を俯瞰してどういう世界になればいいのかというようなことを、いくつか項目に分けてお話をさせていただきますかと思ひます。重複する点があると思ひますけれどもその辺りはご了解いただきたいと思ひます。

私は愛知大学を昭和33年卒業し、就職をし

て東京、大阪、広島を転々と歩きながら今の横浜に落ち着いて約40年になります。それから同窓会の神奈川支部のお付き合いが始まったと同時に同文書院の皆さんとのお付き合いが始まりました。同文書院の同窓会の呼称を滬友会こゆうかいといいます。滬こというの難しい字ですけども、上海の古い呼称です。車のナンバープレートナンバープレートの頭に滬こという字がついていると思ひます。今も多分それで走っているのではないかと思ひます。滬友会の皆さんの色々なお付き合いの中にはいくつかの項目があります。

先ほど皆さんがご紹介されましたように先覚の墓参、それから寮歌祭、滬友ゴルフ会という項目があります。墓参については、最初は埼玉県の東松山市の靖亜神社で春と秋に行われました。この時は多くの書院生の皆さんが来て本当ににぎやかにできました。祭祀が終わると必ず一杯のお酒が出ます。そういう中で色々な為になるお話を伺いました。墓参はその後、滬友会が解散をしてからは42期の倉田俊介さんを中心に行つておられましたが、お亡くなりになつてからは私のほうで引き継いで、春には横浜・鶴見で根津先覚の墓参をし、それから秋は荒尾先覚の墓参を谷中の全生庵で実施しています。ちなみに今年は4月の6日には総持寺で墓参をする予定で皆さんにご案内をしています。桜はちよつと散りかかっているか、そんな感じだろうと思ひます。是非墓参に参加して、先ほどか

ら色々な話が出ている同文書院の歴史に触れて、それに対して私どもがどういうふうに進んで行くのだろうというふうなことを思ひながら皆さんと美味しいお酒を飲みたいと思つておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

その次は寮歌祭です。最初は日本寮歌振興会というのが中心になつて開催しており、当時は日比谷公会堂での登壇が終わると出口の大きい階段の所で皆並んで集合写真を撮るわけです。その時には法被を着たり、大旅行の時の服装をして半ズボンで帽子を被つた人たちが元気に並んだ様子が思ひ出されます。本間先生が愛大は参加資格があると言われていましたけれども、寮歌振興会に対する推薦文を40期の秋山征士さんが書いてくれました。その内容は非常に立派というか心を打つような推薦文になつておりました。そういうことを経て、千葉寮歌祭の出場をテストされて、翌年の日比谷の本番登壇となりました。

寮歌祭への参加は、書院の魂とか愛大の魂が重なつて元気にステージに立つたということになります。寮歌祭というのは、旧制高校が全寮制でしたから、その中で自然に人生を語り、世界を語りという生活をしながら寮歌が生まれております。そういうものを愛大の寮歌としても是非引き継いでいきたいというふうに思ひます。

その次は滬友ゴルフ会です。勝田のゴルフ場で始め、その次は芙蓉カントリーでありました。春と秋の年二回でした。近衛通隆さんはいつも上手で良いスコアも出しておられました。今日お見えの42期の高階昇さんもゴルフが非常に好きで勝田や芙蓉カントリーほかで何度も一緒にしました。私のほうが少し若いのですけれども、いくら頑張っても高階さんの腕には及ばなく、お酒を呑むぐらいは負けまいと思つて飲みましたが、お酒のほうも中々達者で、いつも勝っているのが現実でした。

それから、先ほどの話にもありましたけれど、北京で国際ゴルフの大会がありました。これは近衛会長が団長、42期の小崎昌業さんが秘書長として行われたゴルフ大会でした。中国では当時、ゴルフの経験がありませんから、ゴルフマナーがあまり良くなかったのですね。日本でも始まった頃はそうだったと思いますけれども、日本から行った人が非常にブービー言つて面白くないと不満が出ました。そこら辺りは後の一杯の懇親会で水に流そうというようなことで楽しいゴルフの会を致しました。

話は変わりますけども現代中国学部ができたのが1997年で、学生さんが中国へ行って研究調査をしてその報告会が開かれました。そこに、書院生の皆さんが大勢で行きました。その前後には観光をして楽しみました。報告会が一日かかりますから夕食時にパ

ーティーをします。その中で学生とも話をするし教職員の方とも話をします。非常に意義のある会ができました。最初の北京は行きませんでした。上海は7・8回行きました。景色は色々変わっていると思ひますけれども、現地の大学生と一緒に調査をしたり、発表の時に互いに情報交換しながら発表する資料の整理をしたり大学生同士の交流も大変意義があつたのではないかと思ひしております。



東亜同文書院記念基金会のスタートについては、先ほど藤田先生からお話があつたように元気なうちに書院の皆さんが何かを残したいと同文書院の学績だとか足跡だとか、そういうものを残して日中や社会に貢献しようというところで皆さんの志がまとまつて41期の高遠三郎さん、高瀬恒一さん達が意見調整をして原案を作つて平成3年の3月8日に発起委員会が開かれて役員構成や規則ができて、同年の9月の10日に創立総会が行

われました。同時に寄付集めの作業が始まつて生存している会員の皆さん、ご遺族の皆さん、元職員の皆さん、そういった方が約1億円。人数は少ないですから一人当たりになると相当な金額になるわけですね。霞山会と愛知大学から5千万円ずつの出捐があつて合計2億円でスタートをしました。それで第1回の基金会の総会、表彰式が平成5年の11月5日にありました。毎年、会が重ねられて今年が25回になります。

日清戦争のちよつと後の1901年に同文書院ができて、それから少し後に日露戦争があつて、1911年に辛亥革命があつて、色々な変遷があります。その中で同文書院の皆さんが中国の上海で勉強、生活の体験をしたという事は、私どもが学ぶにあつて、偉大な項目がたくさん入っているのではないかと思ひます。滬友会の皆さんとお付き合いの中から私は色々な関心を持ち、それ自分自身の成長に取り入れたい、という思いから色々なことを教わりました。卒業年ごとに中国上海の違いを知ることができ、卒業後社会人として商社や外交官などとして世界中をまわつておられた活動内容を知ると、色々な意味で刺激を受けるわけです。そういう中に私が属する同窓会があります。同窓会が母校、愛知大学に対して同窓会の規則にもありますけれども愛知大学母校の隆昌、発展にどう貢献できるか、大学の教育力向上にどう貢献できるか、というようなことも私は関

心を持っておりません。どこの大学でもやっていますけれども、いくつかの自治体と協定を結んでおります。例えば地域政策学部は具体的に地域間との関係を進めておりますし、全学的にも多くに地域間善意活動として地域との関係をもつて学生の教育、人間力向上に役立つような活動をしております。大学の活動をホームページ、その他で情報をキャッチし、関心のあるものにできるだけ参加をして私自身の成長の糧にするように意識をしております。

話はガラッと変わりますが、大げさに言つて世界を俯瞰する中で世界の動きが非常に大きいのではないかと思います。国内も大事な時期になっていると思います。隣の国々は気の許せない国が多いですね。例えば、北方領土の問題、竹島の問題、尖閣諸島の問題など、尖閣周辺には毎日のように中国の艦船が周流をしています。そういった意味で第一列島線だとか第二列島線だとか、核心的利益をどういうかたちに進むかということも考えれば心穏やかではありません。中国では昨日から全人代が始まっております。今朝の新聞では成長率の目標が6%から6.5%と書いていました。国防費についてとか景気対策の強化、ばらまきリスクの危機感、これらは心配事かもしれません。中国製造2025封印とありました。海洋強国建設を改めて宣言と強国志向の強い国にするという志向についてはそういう方針が再確認されていると思

います。日本として誰がするのか。国会議員が国のことを考えるのですが、今のこれらに対応を参議院の予算委員会では安全保障についての具体的な話がなく非常に不安に感じます。

そういう点では霞山会の活動の中で午餐会というのがありまして、毎月講演会をしております。主には外交関係、国際関係の演題が多くなっております。毎回おいしい昼食を頂きながら講演会を聞いて私の勉強の場にしております。霞山会が毎月発行している

「東亜」という月刊誌は、色々な情報が集まります。霞山会が準備していただきましたので、見ていただきたいと思います。こういうものを見て社会の動きがどうなっているか、というようなことを考えながら今夏の参議院の投票をどうするか、一つの材料になるかと思えます。月刊誌は他に3誌見ておりますが、色々な情報は月刊誌、テレビ、新聞などに出てきますけれども、言っていることは全部正しいかどうかということ是非常に難しいです。新聞によっても特徴があります。テレビのコメンテーターでも会社の系列から見て不都合なことは多分言っていないのではないかと。そういうことを総合して自分でもって判断しなければいけないのかなと思えます。色々なお付き合いの中で色々な情報を集めながら自分がどう成長ができるかをいつも考えながら私は生活をしています。先がそんなに長くはありませんが、皆さんと

色々なお付き合いをしながらそういう場が私の成長に繋がるのかなと思っております。至らない私ですけれども今後ともご指導をお願いしたいと思えます。大変長くなりましたけれどもお礼のご挨拶にしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。



東亜同文書院記念基金会 記念賞・功労賞・奨励賞のこれまでの受賞者

第1回 平5(1993)年度 記念賞	平成5(1993)年11月5日 上海交通大学 中日科技研究会 (翁史烈(当時の上海交通大学学長)が会長) 科学技術及び教育に関する日本の資料を中国の学生向けに刊行するなど日本事情を中国に紹介する活動を行っている。(東亜同文書院大学45期専門部卒業生吉川信夫氏は私財を投じて同会を支援した。)
記念賞	谷 光隆氏 (元愛知大学教授) 大旅行調査を研究 大運河調査報告書を刊行。
記念賞	菅野俊作氏(東北大学名誉教授 41期) 中国人留学生を支援。
第2回 平6(1994)年度 記念賞	平成6(1994)年9月16日 林文月氏 (台湾大学名誉教授) 源氏物語他を中国語に翻訳刊行。
記念賞	栗田尚弥氏 (埼玉大学講師) 「東亜同文書院 日中を架けんとした男たち」を刊行。
記念賞	白川正雄氏 (42期) 戦後スマトラに永住し戦火で消失したモスクを再建。
記念賞	村上和夫氏 (長野県中国文化研究会副会長) 中国古代瓦当文様の研究を刊行。
第3回 平7(1995)年度 記念賞	平成7(1995)年9月13日 藤田佳久氏 (愛知大学教授) 大旅行調査報告書を解説し「中国を歩く」等を 刊行。
第4回 平8(1996)年度 記念賞	平成8(1996)年9月6日 ダグラス・レイノルズ氏 (ジョージア州立大学歴史学部副教授(注:肩書きは受賞当時)) 東亜同文書院の大旅行調査を研究し、それが戦後米国で発展した地域研究(Area studies)よりも古い歴史を持つ優れたものであることを検証し「地域研究の知られざる起源日本の東亜同文書院」を刊行して広く世に紹介した。
記念賞	陳 弘氏 (44期) 日中要人の会談の通訳 人民日報東京特派員として友好促進に貢献。
第5回 平9(1997)年度 記念賞	平成9(1997)年10月7日 遠山正瑛氏 (鳥取大学名誉教授) 日本砂漠緑化実践協会の設立ボランティアを指導し内蒙古砂漠に植林。
第6回 平10(1998)年度 研究奨励賞	平成10(1998)年9月24日 薄井由氏 (上海復旦大学修士課程) 「東亜同文書院大旅行初歩研究」を中国で出版予定書院の業績を中国で紹介。
研究奨励賞	水谷尚子氏 (日本女子大博士課程) 書院中華学生部を研究し論文「東亜同文書院に学んだ中国人」で同学生部の業績を紹介。

第7回 平11(1999)年度 記念賞	平成11(1999)年9月28日 翟新(テキシン)氏(上海復旦大学大学院修士課程修了 慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程) 東亜同文化の日中近代史における足跡を研究、再評価する論文を発表。
研究奨励賞	劉永誌氏(愛知大学大学院文学研究科博士後期修士課程 博士学位取得) タクラマカン砂漠の困難な現地調査を行い、その日本語論文は辺境の地誌学的研究として高く評価された。
第8回 平12(2000)年度	平成12(2000)年9月29日 名古屋テレビ「青春の中国」取材班 東亜同文書院の「日中の架け橋を」という理想に生きた書院生の青春とそれを現代に受け継ぐ愛大学生の姿を生き生きとテレビで紹介。
第9回 平14(2002)年度	平成14(2002)年9月26日 西所正道氏 「上海東亜同文書院風雲録」を刊行。卒業生たちの足跡を追うことにより、東亜同文書院の建学の精神が世紀を越えて現代に生き続ける姿を広く世に紹介。
第10回 平15(2003)年度 記念賞	平成15(2003)年9月24日 工藤俊一氏(元北京大学文教專家) 「北京大学 超エリートたちの日本論—衝撃の「歴史認識」」を刊行。各方面から高い評価を得た。
第11回 平16(2004)年度 記念賞	平成16(2004)年9月29日 今泉潤太郎氏(愛知大学名誉教授) 「愛知大学『中日大辞典』」の編纂に長年献身的に力を注ぎ、同辞典の内外における高い評価の形成に多大の寄与をした。
第12回 平17(2005)年度 記念賞	平成17(2005)年10月7日 大森和夫氏(国際交流研究所長)・弘子さん夫妻 日本語教材を中国の大学に寄贈するなど日中文化交流活動を続けた。
第13回 平18(2006)年度 記念賞	平成18(2006)年12月8日 テレビ宮崎 強制連行で過酷な労働を強いられた中国人労働者を親身にかばった勇気ある日本の青年の精神と行動力のルーツを辿るヒューマンドキュメンタリーを制作放送した。
奨励賞	成瀬さよ子氏(愛知大学豊橋図書館司書) 内外のぼうだいな資料を収集整理し貴重な「東亜同文書院関係目録」を作成刊行した。
第14回 平19(2007)年度 記念賞	平成20(2008)年1月29日 浅川義基氏 北京国際元老テニス大会に連続20年間出場する中で、会の推進的役割を果たし、日中友好と国際親善のために尽力した。

<p>第 15 回 平 20(2008)年度 記念賞</p>	<p>平成 21(2009)年 1 月 30 日 工藤美代子氏 著書「われ巢鴨に出頭せず」において文麿公の行動を論理的に検証したが、これは東京裁判史観を根底から覆す程の功績があった。</p>
<p>第 16 回 平 21(2009)年度 記念賞</p>	<p>平成 22(2010)年 1 月 27 日 葉敦平氏（上海交通大学校史研究室教授） 東亜同文書院の上海交通大学キャンパスの占用、両校の近隣同士の友好関係などを、史実に基づき組織的に研究し、「資料選集」を編集。</p>
<p>第 17 回 平 22(2010)年度 記念賞</p>	<p>平成 23 年(2011)年 1 月 26 日 小坂文乃氏 著書「革命をプロデュースした日本人」で、孫文に対し多大の援助を与えながら「一切口外シテハナラズ」として革命運動の隠れた援助者であった梅屋庄吉の生涯を明らかにした。</p>
<p>記念賞</p>	<p>愛知大学中日大辞典編纂所 鈴木擇郎先生らにより計画された東亜同文書院中国語教育のシンボルともいべき辞典編纂に長年取り組み中日大辞典第三版を刊行。</p>
<p>第 18 回 平 23(2011)年度 功労賞</p>	<p>平成 24 年(2012)年 1 月 24 日 藤田佳久氏（愛知大学名誉教授、愛知大学東亜同文書院大学記念センター初代センター長） オープン・リサーチ・センター事業実施。東京・中日・北陸中日新聞連載「東亜同文書院の群像」執筆。</p>
<p>奨励賞</p>	<p>武井義和氏（愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員） 「孫文を支えた日本人」出版。「中国における東亜同文書院の『資料選集』」翻訳。</p>
<p>第 19 回 平 24(2012)年度 奨励賞</p>	<p>平成 25 年(2013)年 1 月 25 日 保坂治朗氏 それまで東京同文書院の実態が幻的存在であったのを実像化した点で先駆的であり、当記念センターの書院研究で当初からなかなかアプローチ出来なかった空白部分を埋め、時代背景にも言及されつつ東亜同文書院のある種原点を解明された。</p>
<p>奨励賞</p>	<p>有森茂生氏 東亜同文書院関係の図書、資料文書、写真、レコードなどを 2008 年以來ほぼ毎年のように寄贈され、愛知大学東亜同文書院大学記念センターの展示や研究に貢献された。</p>
<p>第 20 回 平 25(2013)年度 記念賞</p>	<p>平成 26 年(2014)年 1 月 28 日 岡部達味氏（東京都立大学名誉教授、霞山会元理事） 中国政治・中国外交を専門とした学術研究に加え、メディアを通じて我が国論壇としてリードする役割を果たされた。1997～2001 年には日中友好 21 世紀委員会日本側座長を務められ、日中間の相互理解促進に大きく寄与された。</p>

<p>功労賞</p>	<p>平井誠二氏（公益財団法人大倉精神文化研究所研究部長）</p> <p>東亜同文書院卒3期生大倉（旧姓江原）邦彦氏が戦前設立した大倉精神文化研究所の研究員として、同研究所の研究活動を企画運営されている。東亜同文書院関係にも強い関心を持ち、多くの史資料収集を行なうとともに、機関誌『大倉山論集』に多くの研究者を動員して、その成果を集積されている。</p>
<p>第21回 平26(2014)年度 記念賞</p>	<p>平成27年(2015)年1月27日</p> <p>北川文章氏（霞山会顧問、霞山会元理事長、山一証券元副社長）</p> <p>日中間の文化交流事業、留学生交流事業、日中間の相互理解の推進に尽力されたことにより、中国上海交通大学及び浙江大学より顧問教授に任命されるとともに、揚州大学より名誉教授の称号を授与された。霞山会理事長就任時には愛知大学理事も兼任され、史実に基づいた「上海交通大学と財団法人霞山会の歴史関係に関する共同研究」に尽力されるなど、国際研究交流事業推進に多大な貢献をなされた。</p>
<p>功労賞</p>	<p>仁木賢司氏（ミシガン大学上級ライブラリアン）</p> <p>東亜同文書院関係の文献資料を精力的に収集し、ミシガン大学等の研究者へその提供および指導をされ、アメリカにおける東亜同文書院研究のベースをつくられた。2009年には「ミシガン大学の東亜同文書院およびアジア系文献史資料のグローバル化」、2014年には「書院との出会いと史資料」と題して愛知大学で講演され、東亜同文書院大学記念センター発展への期待を力説された。</p>
<p>第22回 平27(2015)年度 記念賞</p>	<p>平成28年(2016)年1月22日</p> <p>小崎昌業氏（東亜同文書院大学第42期、愛知大学第1期、在モンゴル特命全権元大使、在ルーマニア特命全権元大使）</p> <p>東亜同文書院大学の第42期生並びに愛知大学（旧制）の第1期生として、歴史的に関わりが深いこれら2つの大学の発展のために、一般財団法人霞山会を理事、また顧問として、同時に、学校法人愛知大学の監事も務められるなど、生涯を懸けてご尽力されてこられた。</p> <p>また、外交官としてのご活躍、東亜同文会の昭和期の諸活動の取りまとめ、愛知大学に引き継がれた現地主義教育へのご指導など、実質を伴ったご功績を残してこられた。</p>
<p>第23回 平28(2016)年度 功労賞</p>	<p>平成29年(2017)年2月1日</p> <p>村上武氏（回光会・東光書院院長）</p> <p>東亜同文書院18期生で、中華学生部の教員を務められた父、村上徳太郎氏の御子息。父は、東亜同文書院の生みの親である荒尾精、近衛篤磨、根津一の三先覚（聖人）を祀った靖亜神社のご神体を帰国後ご自宅（埼玉県）に東光書院を興して祭られた。武氏は、父を継承しご神体を祀られてきた。</p> <p>あわせて、荒尾精が志した中国、東アジアとの共同、および実践の精神を評価し、著書や伝記を復刻したほかそれをふまえ、評論紙「回光」を月刊にて発刊し、啓蒙活動を進め、2015年には、『日清戦勝異論』を刊行し、荒尾精を顕彰する諸活動に尽力なされた。</p>

第24回 平29(2017)年度
記念賞

平成30年(2018)年3月28日

山田正氏(霞山会元理事長、愛知大学元理事)

一般財団法人霞山会の理事(2006~2015年)、筆頭常任理事(2007年)、理事長(2008~2014年)をつとめられ、文化・教育、学術・研究交流分野の発展に尽力され数々の業績を残された。また、2008年4月より愛知大学理事に就任され、当会と愛知大学の繋がりをより緊密にされた。

霞山会の広報誌『Think Asia』を創刊し、アジア諸国・地域の社会、歴史、文化に関する情報の提供に尽力され、学術・研究交流では、上海交通大学および上海市日本研究交流協会、北京の中国国際交流協会、中国教育国際交流協会等各機関との研究者の相互交換、共同研究、シンポジウムなどをおこない学術研究交流の活性化をはかられた。

第25回 平30(2018)年度
功労賞

平成31年(2019)年3月6日

中島寛司氏(愛知大学同窓会元神奈川支部長)

愛知大学同窓会のリーダーとして滬友会、霞山会、愛知大学が主催する多岐にわたる行事にかかわり、東亜同文書院卒業生と愛知大学関係者とのつなぎ役を担われるなど、人望と行動力は第一人者である。



- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|
| 伊藤綾子 | 武井義和 | 田辺勝巳 | 水野紘治 | 堀田幸裕 | 高井和伸 | 栗田尚弥 | 平井誠二 | 嵯峨隆 | 山中弘 | 仁木賢司 | 森健一 | 倉持由美子 | 金森定夫 | 夏目益良 | 会田正彦 | 戸田七支 | 中川義弘 | 飯田正明 | 村尾竹一 |
| 長本沙世子 | 鳥越剛 | 伊藤登美夫 | 阿部光 | 山口昇 | 齋藤眞苗 | 岩間毅 | 岡村幹吉 | 杉浦福男 | 有森茂生 | 阿部純一 | 荒尾初雄 | 畑野勇 | 大滝則忠 | 淀野敏夫 | 星博人 | 藤田佳久 | 三好章 | 釜井卓三 | |
| 谷口優 | 小川悟 | 田沼敏子 | 高階昇 | 土井義昭 | 近藤智彦 | 川井伸一 | 中島寛司 | 池田維 | | | | | | | | | | | |

表紙写真に芳名

東亜同文書院記念基金特別奨励賞 東亜同文書院記念基金栄誉賞 授与

東亜同文書院記念基金会では、書院への理解を深め、伝統を引き継いでいくことを期待して本学学生へ2種類の表彰をしております。1999年度より東亜同文書院記念基金栄誉賞を設け、学位記授与式において、人物・学業成績が優れた者を表彰しています。

また、2013年度より東亜同文書院記念基金特別奨励賞を設け、入学式において入学試験の成績が最も優秀な入学者に対して、同賞を贈っております。

【2018年度受賞者】

東亜同文書院記念基金 特別奨励賞

法学部 河合 郁哉かわい ぶみや

東亜同文書院記念基金 栄誉賞

地域政策学部 山下小百合やましたさゆり

国際コミュニケーション学部

丸山 佳子まるやま かこ



基金会役員名簿

会長

川井 伸一

(愛知大学理事長・学長)

副会長

池田 維

(霞山会理事長)

理事

藤田 佳久

(愛知大学名誉教授)

星 博人

(霞山会常任理事)

三好 章

(愛知大学東亜同文書院大学
記念センター長)

近藤 智彦

(愛知大学事務局長)

監事

岡村 幹吉

(岡村会計事務所)

参列者、

アーカイブズを語る

授賞式の後、交流会が催され、書院・愛知大学卒業生や関係者の方からお言葉をいただきました。

田辺…それではただ今から交流会を開催させていただきます。最初に乾杯をさせていただきますと思います。愛知大学同窓会の土井会長、恐縮でございますが、前のほうにお越しただけますでしょうか。

土井…愛知大学同窓会の会長、土井でございます。突然のご指名で大変恐縮致しておりますが、乾杯の音頭をとらせていただきたいと思っております。本日は第25回の東亜同文書院記念基金会という事で同窓会の中島さんが受賞され、私、大変喜んでおります。中島さんにおかれましては本日からさらに色々頑張っていただき是非長生きをして、愛知大学同窓会のために大いに活躍をしていただくことをお祈り申し上げます。それでは乾杯をさせていただきます。皆さま方のご健勝、ご多幸、特に中島さんのご健勝をお祈り申し上げます。乾杯をさせていただきます。乾杯ありがとうございます。

田辺…ここで皆様にもお一人ずつお話をいただきながら交流を深めていただきたいと思っております。最初に愛知大学学長の川井先生から大学の状況などを含めてお話をいただきます。よろしくお願いいたします。

川井…ご指名により最近の愛知大学の状況について一つご紹介させていただきたいと思っております。文部科学省はこの間に毎年、私立大学の研究ブランディング事業プロジェクトについて全国の私立大学を対象に募集をかけております。ちょうど今年は3年目なのですが、今年度愛知大学が応募をしたところ最近、採択されたという通知をいただきました。結果は全国で20の大学が採択されたということです。愛知大学の研究の趣旨の一つは創立の精神でもあります「地域への貢献」というのがずっとございまして地域研究に力を入れてきております。今回の事業においては「越境地域マネジメント研究を通じて縮減」(縮減というのは縮まるという意味ですが、)

する社会に持続性を生み出す大学」というテーマで研究を取り組む予定でございまして。大学のいくつかの研究所がございまして、お聞きになつているかと思えますが、三遠南信という言葉があります。三河、遠州、南信州、それを合わせて三遠南信と呼んでいます。これは当然、県境をまたいだ地域です。沿海部から山間部も含めての地域ですが、その地域を研究する三遠南信地域連携研究センター

が愛知大学にございまして、そこを中心として他のいくつかの研究所等と協力してむしろ3年間、先ほど申し上げたようなテーマで研究をしてその成果を社会に発信する計画でございます。単に研究するだけでなくテーマの内容自体がそれぞれの社会の色々な団体との間の共同作業というのが入っておりますので、これを通じて大学が地域の社会にいかに関与していくか。これから人口が大幅に減っていくという社会の中で、社会の持続性を維持・向上するにはどうしたらいいかということを中心にして研究を進めていく予定でございます。詳しくはお手元の資料にありますのでどうぞ後でご覧ください。以上でございます。

田辺…ありがとうございます。続きまして、本学近藤事務局長、お願い致します。

近藤…改めまして皆さん、こんにちは。事務局長の近藤と申します。今日は中島寛司さんの東亜同文書院記念基金会功労賞の受賞おめでとうございます。学長から大学の新しい動きを紹介していただきました。私は平成元年、豊橋校舎法経学部経営学科を卒業しておりますので、卒業生として、大学職員として、中島さんとの関わりを少し紹介させていただきます。先ほど藤田先生も中島さんのご紹介の中で大学教職員に対して教



育、研究はどうあるべきか。ご指導と言いま
しょうか、度々教職員に励ましの言葉をいた
だくということがありました。私自身もまだ
一般職員の頃に学生授業評価というのがあ
りまして、中島さんは非常に先生方のゼミを
中心とした学生の指導に大変興味・関心がお
ありで、授業評価担当をする私にも「アンケ
ートの集計だけでなくそこから見える教育
の問題」であるとか、「職員の立場から研究
する先生が学生指導するあり方」をきちんと
提案できるように、と仕事にあぐらをかいて
はいかんど、とご指導を受けたことがありま
した。非常にはっとした記憶がございます。
さらには、ゼミ活動にも関心を寄せ、同窓会
の広報委員という立場で、一生懸命頑張る学
生を表彰したいと推薦書を書くようなお話
もありました。学生のそういったことを見な
がら職員としても学生の学びのあり方みた
いなものを常に見なきゃいけないというよ
うな思いもあつたと思います。

事務局長職には一昨年の6月からついて
おりますけれども、先ほどお墓参りのお話も
ありました。昨年は2月に根津先生、5月に
本間先生、9月に荒尾先生、それぞれお墓参
りをさせていただく機会がございました。そ
ういった中で東亜同文書院と愛知大学をつ
なぐ3人の大きな存在の先生方のお墓参り
をする中で愛知大学の原点、こうした先生方
がいなければ愛知大学はありませぬし愛知
大学の卒業生である私の存在もないのかと
いうように思うのです。そうした中で中島さ
んから伝統ある東亜同文書院、愛知大学の流
れも教えていただきましたし、教育機関に身
を置く職員としてどう仕事に向き合うかと
いうようなことも教えていただいたという
ことです。これからも同窓会ですとか愛知大
学の関わりの中で中島先生とは色々ご指
導をいただく機会も多々あるかと思いま
す。中島先生にはいつまでも元気ですま
す。今日はおめでとうございます。

田辺…引き続きまして、東亜同文書院記念セ
ンターの取り組み等々に関しまして三好セ
ンター長お願い致します。

三好…ご紹介いただきました東亜同文書院大
学記念センター長の三好でございます。先ほ
ど学長から文部科学省私立大学研究ブラン
ディング事業の話がございました。愛知大学

のブランドは一体何なのかと考えてみます
と、大学は研究と教育の両方あってはじめて
本分となります。ですから同文書院以外の研
究をどうするかという課題がございます。東
亜同文書院大学記念センターもそれ自体が
すでにブランドではないかと考えておりま
す。外から見ますと、東亜同文書院はすで
に愛知大学のブランドになっているのです。で
すから、新たにそれを展開させていく時、愛
知大学の始まりに関わる事柄を今風に言い
かえますとグローバルがございます。地域へ
の貢献というところで愛知大学が評価され
たのは、同文書院以外の研究の蓄積がさら
に発展したものと理解することができると
思います。私も記念センターは同文書院及
び愛知大学について多くの方々を知って
いただくため、毎年、海外を含めあちら
こちらで展示会、講演会を催しており、昨
年は愛知県で行いました。愛知県内で行
うという気持



ちの表れであります。そこには、同文書院の伝統をいかに受け継ぐかという問題が大きく存在しています。そうした先人の意志を継承することを目的に作られました愛知大学現代中国学部卒業生と現役の学生が講演会に登壇いたしました。一人は名鉄観光サービズ(株)名鉄国際貨物カンパニーに勤めている社会人、もう一人は現役学生で現代中国学部の教育実践の一つである中国現地での社会調査、そして現地企業でのインターンシップを二人とも経験しております。彼らが若い目で見た中国、若い目で見て働いた中国。これを話してくれました。お聴きくださった方々には非常に好評でありました。愛知大学東亜同文書院大学記念センター記念報第27号に収録しますので是非ご覧いただければと思っております。

なお、今月のことではありませんが、向野堅一を中心としたワークシヨップを予定しております。福岡の直方に向野堅一という方がおりました。荒尾精の薫陶を受けて日清貿易研究所に入った方です。1894年、遼東半島の戦役のときに従軍通訳として従軍しました。玄洋社とも関係を持っていました。今後は、より拡大したかたちで日清貿易研究所から東亜同文書院へという道筋でシンポジウムを開きたいと思っております。日程が固まりましたらご案内を差し上げたいと思います。

さらに、書院生の残した大旅行関連の日記

や報告書の再読、そしてその現状に関する調査も内モンゴル自治区フフホトあたりを中心に考えております。現在、このようなことを考えておりました、これからも皆様方のご支援を是非ともお願いしたいと思っております。続きましては藤田名誉教授にお話をいただきたいと思えます。

藤田…東亜同文書院大学記念センターの藤田です。我々のところには色々なところから色々な資料や本が届きます。その中で代表的なものを紹介します。一つは『上海交通大学史』。これは東亜同文書院がかつて交通大学で授業をやっていた歴史がございませう。これは今から30年ぐらい前に、同大学の本が出たのです。簡単な内容でした。けれども、交通大学は長い歴史を持つようになったことから、新たな大学史を編集刊行されました。これがその全8巻です。我々ともずつと交流をやってきている交通大学と愛知大学の関係を大事にしたいと考え、交通大学が書院が占拠したといわれるような第2次上海事変後の歴史があつたものですから、きちんとした歴史を理解してもらって書いてもらいたいと願っていました。特に、北川文章様が霞山会の理事長の時代に霞山会で積極的に働いていたのだいて、両方で史実に基いた書院研究を5年間近く行い、研究講演会を交通大学と愛大の両方でやつたのです。書院に関する色々な発表を上海と愛大で交互にやりまし

た。上海で東亜同文書院のシンポジウムをやつたのはその時が初めてであります。私もほかに北京に行つて東亜同文書院の話をしたことがあり、書院についての発表を中国の2ヶ所で行いました。上海の時は歴史研究者がたくさん集まりました。このぐらいの部屋にいっぱいの人たちが来て聞いていただきました。当時の日中関係で言いますと、大々的に宣伝するというわけにはいかなかったのですが、上海周辺の交通大学の関係者の人たちが集まつたので彼らに大きな影響を与えたと思えます。

新たな大学史全8巻で、この中の第4巻中に黄色い付箋が貼つてあります。2ページだけです。東亜同文書院のことが載つていて「記念日に東亜同文書院が我々の大学に入ってきた。」それは日本の軍部による配属のもとで入つて来た。そういう表現で表してあります。写真が一枚載つています。これは交通大学の正門から学徒出陣で皆並んで外



へ出ていく。その写真が載ってしまって、その辺のところは中国側も譲れないところかなというふうな解釈をしました。いずれにしても、我々の研究会の成果だと思うのは中国一般のイデオロギーではなく、非常に客観的に書いていただいているということであります。これは後でご覧になっていただいたらと思います。そのほか、この授賞式にかつて表彰された書院卒の工藤俊一様。北京で色々と活躍された方で、『日中70年、戦争と反日、友好。戦前、戦中、戦後の体験史』。東亜同文書院の経験を踏まえていかに中国との交流をやってきたかというようなかたちの個人的なドキュメントが書かれ、出版されております。これはさくら舎というところから出版されています。これもまたお読みになっていただければと思います。これはある在日朝鮮社会学者の朴庸坤さん^{パク・ヨンゴン}という方の自叙伝で、副題が「博愛の世界観を求めて」とあります。愛大の学部と大学院中国研究科を出られた方で、現在韓国の大学教授をやっています。この方が愛知大学での研究生生活、学生生活の中で、多くの指導教授に育てられたというようにことが書かれています。基本的にはこの3冊を今回持ってまいりました。これが次の記念報に紹介文として載せたいと思っておりますので、ご覧になっていただけたらと思います。簡単ですけど新着本のご紹介をさせていただきます。

三好…ありがとうございます。一つ重要なことを忘れておりました。先ほど藤田先生が3冊のご紹介をされましたが、もう1冊重要な本があります。東京女学館大学にいらつしやつた藤谷浩悦さんが、東亜同文会と深く関わった実業家井上雅二と妻の秀についての評伝です。井上雅二はご存知のように荒尾に屈擡を受けた人物です。その前の日清貿易研究所等々で大きな仕事をするのですが、彼はそういった仕事をした上で南洋協会に関わつたり、日本のアジア論的な仕事をしました。秀というのは奥様で、日本女子大を卒業してそのの教員になりますと熱心に女子教育に関わつた人物であります。その両者について『井上雅二と秀の青春（一八九四—一九〇三） 明治時代のアジア主義と女子教育』（集広社、2019年）という500頁近い本です。それも是非お目通ししていただければと思います。

さて、次に武井さんです。武井さんは本基金会18回目の奨励賞を受けております。今年4月から別のところにフルタイムの仕事で就職することが決まりました。私たちとしては非常に残念ですが彼のためには非常に良かったということですね。去年11月に神戸の孫文記念館で、放送大学の西村成雄先生などが中心になって全国の孫文関連の資料及び建物等々の紹介を行いました。そのとき我々のセンターから武井さんが参加しまして愛大の記念館等々を紹介説明してまいりました。

そのことを含めてご挨拶をお願いします。

武井…ただ今紹介をいただきました武井義和でございます。現在、愛知大学東亜同文書院大学記念センターで資料整理の業務ならびに孫文支援者でありました山田良政、純三郎兄弟に関する研究をやっております。先ほど三好センター長のお話にもございましたように去年11月に神戸で「孫文、宋慶齡聯席會議」というものが開かれました。年に一回、孫文に関連する施設の代表が集まって、中国を中心に東南アジアなどで孫文に関する会議を開くという催しなのですが、去年初めて日本で開催されました。それを記念しまして孫文記念館の方から「記念センターも参加して愛知大学が持っている孫文関連資料を紹介してください。」というお話をいただき、私が当日会場で発表させていただいたということでございます。パワーポイントを中国の方々向けにまとめて発表しましたが、本日そちらをご用意しています。中国語になっておりますけれども、説明を加えながら皆様にご覧いただきたいと思えます。画像が全部で二十数点ありますので、適宜割愛しながらお話をしてまいりたいと思えます。

こちらが豊橋の場所です。中国の方に紹介する意味でこういう地図を作りました。こちらが愛知大学記念館で秋の紅葉のきれいな時期に撮影をした私のお気に入りの一枚でございます。まだお越しになってない方は、

是非とも足をお運びいただければと思います。2017年の9月から10月にかけて一階部分の展示室を大幅にリニューアルして展示資料等の入れ替えを行いました。従来の孫文関連展示室は「山田良政・純三郎兄弟、孫文展示室」と名称を変え、従来東亜同文書院関連展示室にあったものを一部屋に独立して展示し、中身の濃い展示室に生まれ変わったのではないかと考えております。多くの見学者がいらっしやっています。左側は一般の方がご覧いただいている様子です。JR東海が主催する「さわやかウォーキング」などの催しに愛知大学記念館を公開するのですが、大学史展示室と共に山田兄弟・孫文の展示室も熱心にご覧いただいています。右側は学生たちが見学する様子です。毎年、春学期に1年生を対象とした入門ゼミ・学習法という、大学の歴史を学習するカリキュラムがあるのですが、学生たちに教育をする場としても展示室が使われております。

ここから山田兄弟についてお話をさせていただきます。山田良政・純三郎兄弟が孫文を支えるという話であります。兄は33歳で孫文が1900年に中国南部の広東省で起こした武装蜂起に参戦して命を落としました。中国の革命で命を落とした最初の外国人といわれる山田良政であります。その弟、山田純三郎は東亜同文書院の教員を経て満鉄に入りました。その後、孫文の辛亥革命1912年の頃から孫文の支援者として中国の革命に

関わっていったという人物であります。孫文が1917年に記した一文があるのですが、中国の革命に奔走した日本人の名前を挙げています。その中に山田兄弟というかたちで冒頭に山田良政・純三郎兄弟の名が挙げられています。孫文が信頼を置いた日本人の一人として山田兄弟がいたということでございます。山田兄弟の出身地は青森県の弘前市です。こちらに立派な山門の写真がありますが、山田家の菩提寺であります貞昌寺というお寺です。※① 初代津軽藩主の津軽為信という人物が建てたお寺です。貞昌寺の境内には二つの石碑が並んでいます。向かって右側の石碑は1919年に孫文が建てた山田良政の記念碑、左側は1976年に蒋介石も関わって建てられた弟の山田純三郎を記念する石碑です。ちよつと拡大して見てみます。こちらが山田良政の記念碑です。山田良政を顕彰する内容が篆刻されています。民国8年、1919年という日付も入っています。「孫文、謹選並書」とあり、孫文の名前も刻まれております。戦後、日本と台湾の中華民国との間で国交があった時代、1952年から1972年までの時代なのですが、日本に駐在する台湾大使は日本着任時あるいは日本を離れて台湾に帰る時、必ず東京からこの石碑を参拝しに弘前を訪れたそうです。戦後、台湾の方からも尊敬された山田良政であったということがお分かりいただけるかと思えます。孫文は山田良政の追悼文も書いており

山田家の菩提寺・貞昌寺（青森県弘前市）



※①

貞昌寺内の山田良政・純三郎兄弟記念碑



※②

ます。こちらは現在、愛知大学記念館の一階の展示室で展示をしておりますので、また皆様も機会があれば足をお運びいただいでご覧いただければと思います。次に弟の山田純三郎の記念碑です。1976年に建てられました。何応欽という中国の戦前、戦争中の中国軍の将軍、大将クラスにあたる将軍が書いたものです。そして、永懐風義という題字があります。こちらは蔣中正、蒋介石のことですが、蒋介石がこの記念碑を建てられるにあたって自ら筆をとって書いた題字でそれがそのまま刻まれています。そういう石碑も山田良政記念碑と並んで建てております。※②山田兄弟と東亜同文書院との関わりを申し上げたいのですけれども、兄の山田良政は元々、東亜同文書院の前身にあたります南京同文書院の教授でした。南京同文書院は1900年8月下旬に南京から上海に移るので



すが、その時に山田良政は学校を退職しまして孫文の元へ馳せ参じます。孫文とは前年の1899年に東京で会っていますので、その一年後にちょうど学校が南京から上海に移ったタイミングで学校を退職して革命に入り込んでいくわけです。弟の山田純三郎は1901年から1904年まで東亜同文書院の事務職員兼助教授というかたちで勤務をしていました。日露戦争従軍後、1907年1月に教授として復帰するのですが、同年4月わずか3カ月で辞職し、南満洲鉄道に就職して上海駐在などを務める。そういう中で孫文と関わりが出てきて革命に入り込んでいったということなのです。

こうした山田良政・純三郎兄弟が残した資料は愛知大学が所有しております。何故、愛知大学が所有することになったかと言いますと、こちらに中国語で書いてございますが、山田純三郎の四男の順造さんという方、この方は1941年(昭和16年)に東亜同文書院

を卒業しています。そういうことから資料を自分が亡くなった後どうするかについて、資料保管のあり方を色々考えた時に書院同期生の阿部弘さんと、村上武さんという靖亜神社を長年営んでおられた方が愛知大学への寄贈が良いのではというアドバイスをなされ、愛知大学がいただくことになりました。

そしてご承知の通り、東亜同文書院の最後の学長であった本間喜一や、東亜同文書院の教職員の方々が中心になって愛知大学が豊橋市に1946年(昭和21年)に誕生したことも合わせて紹介させていただきました。ここから具体的な資料の紹介に入っていきます。この二枚は中国の方にもよく知られている写真です。山田純三郎と孫文が二人で写る写真です。※③ 1911年12月、清朝打倒のための辛亥革命が起こっている最中に、欧米を訪問して香港まで帰り着いた孫文を山田純三郎が出迎えた時に撮った写真です。兄の山田良政が1900年に孫文が起こした惠州蜂起という戦いで命を落としましたので、その弟だと知った孫文が二人きりで写真を撮ろう、ということがこのツーショット写真が撮られました。それを見ていた日中の同志たちが私も私もと集まってきて撮られた写真がこちらの集合写真といわれています。※④ これは1915年です。辛亥革命を成功させた孫文ですが、その後、革命が上手くいかずに第二革命というかたちで独裁傾向を強める袁世凱と対立しましたが失敗に終

わった。日本へ亡命せざるを得ない時期が1913年から1916年までありました。これは1915年に孫文が山田純三郎へあてた革命資金の領収書です。※⑤ 右側が、山田たちが旧満洲の奉天へ出張するので費用を支払うという支払書ですね。こういう革命資金に関する珍しい資料も残っております。こちらにも愛知大学の記念館で展示しております。少し話が前後しますが、今ご覧いただいている先ほどの写真と合わせて、これからご覧いただく写真は全て愛知大学の記念館で展示しております。こちらが孫文と宋慶齡が二人で写った写真です。※⑥ こちらは

孫文书写的收据，付款命令书



※⑤



※③



※④



※⑥

見にくいのですけれども、写真の上と下に直筆のサインが入っています。上には「To Mr. & Mrs. Yanada」というかたちで「山田夫妻へ」という英語のサインも入っています。なかなか

こういう写真は珍しいかと思いますが。これは孫文が広東で樹立した広東護法政府総統府の出入証です。※⑦ 1992年4月26日の日付が入っています。ここでは広東護法政府と表現しましたが、正式政府とか中華民国政府とか色々な言い方があります。この総統府出入証は、山田純三郎に与えられたものです。こういった資料も展示しております。山田純三郎と孫文が深い間柄にあったということを示す資料の一つではないかと思えます。こちらは孫文の長男の孫科という人物が山田家に宛てた訃報電報です。※⑧ これは英語のように書いてあるのですが、ローマ字なんです。父親の孫文が亡くなったと。生前の親しい付き合いに感謝しますというようなことが記されています。

孫文亡き後の山田純三郎の足取りを示す資料の一つがこちらです。蒋介石が1928年、南京に国民政府という政権を樹立しました。その翌年に南京国民政府が山田純三郎に宛てた招聘状がこちらです。昭和4年、山田純三郎は中国の色々な政権、勢力から顧問になつてくれという申し出が出されていまして、今度はこちらに広東国民政府とありますけれども、中国の広東省に樹立された政権です。蒋介石に反対する勢力が広東省に広東国

民政府という別の政府を作ったのです。その時に外交顧問になつてくれということを出された招聘状です。

時代は一気に戦後に飛びます。戦争中、山田純三郎は上海で日本語専門学校を経営するなどしていました。中国人に日本語を教える仕事をしていたのですが、そういう活動をする中で敗戦を迎えたわけです。こちらは1946年(昭和21年)3月16日に山田純三郎に宛てた証明書です。※⑨ ここに小さく名前があります。王光漢という中国の軍人ですが、日本人收容所の所長にあたる人物です。その彼が宛てた証明書ですね。内容は中国語で書かれています。山田純三郎はかつて国父孫文の革命に真面目に従ったため、他の日本人と同じように敗戦国民としての扱いはしません。従来通りの家に住んでもいいし通行の自由を今まで通り認めます。」という内容です。戦争直後の時代にあつても山田純三郎が孫文の協力者ということで非常に評価されていたことが、こうした資料からも分かります。こうした様々な資料からこの山田兄弟、特に山田純三郎の足取りが分かるわけです。

調べていてちょっと疑問に思うことがあります。それは山田純三郎の、特に孫文が亡くなつて以降の日中関係観、中国情勢認識はどういうものであつたかということ。思想的な側面になりますので、なかなか文字としては残らない部分があります。大変な作業

になつていくわけですが、そのように山田兄弟についてまだ明らかにされていない部分があるので、そういうところをこれからも研究してまいりたいと思えます。

孙科发给山田家的孙文讣告电报 (1925年3月)



广东护法政府总统府出入证 (1922年)



国民政府陆军颁发给山田纯三郎的证明书 (1946年)



先ほど三好センター長からのご紹介にもありましたように、私はこの3月末日をもちまして、記念センターの資料整理担当業務、案内業務、研究業務の全てを辞することになります。4月1日から名古屋市にあります学校法人の専任教員として採用されるからであります。記念センターには21年間関わってきました。展示室の立ち上げの段階から関わっていました、その前の2年間、大学院生の時の夏休み、冬休み限定で行っていた資料整理も含めると23年間になります。私はちょうど今46歳です、その半分を記念センターと共に歩んできたということになります。大げさな言い方をしましたが、振り返りますと色々な思い出が頭の中をよぎります。それらは全て自分にとってプラスになっていると思いますし、自分の血となり肉となっていると思います。4月から新しい環境に変わりますけれども、この山田良政・純三郎兄弟の研究は仕事の合間に、少しずつでも研究を続けていきたいと思っています。記念センターという組織、記念センターのメンバーの皆様、そして、この場にいらっしゃる皆様とも引き続きご縁をいただきたい、と思っております。以上をもちましてこの発表と合わせて自己紹介をさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

三好…ありがとうございます。武井さんはこれからお付き合いを是非ともよろし

くお願い致します。それでは関係者何人もおりますのでお話を一言ずつお願いしたいと思います。まず、愛知大学学術支援事務部長の田邊さん。

田邊…皆様、こんにちは。中島寛司さん、本日は功労賞の受賞、誠におめでとうございます。皆様におかれましては、本日本変お忙しい中、授賞式にご出席賜りまして誠にありがとうございます。私の簡単な自己紹介ですが、私も1988年に広島県福山市の高等学校を卒業した後に愛知大学の豊橋校舎の法経学部経済学科に入学を致しました。卒業と同時に学校法人愛知大学に就職をさせていただき、今年で27年目になります。力不足でありますけれども、大学発展のために尽力をしております。私は現在、東亜同文書院大学記念センター、基金会を担当する研究支援課の他に図書館事務課、情報システムに関する業務を統括しております。大学とし



て非常に厳しい時代を迎えるということになりますけれども、引き続き大学発展のために尽力をしまいたいと思っておりますので、皆さん今後ともよろしくお願いを致します。

三好…ありがとうございます。続きまして、センターの事務担当をずっとやっております長本沙世子さん。一言お願います。

長本…長本と申します。豊橋研究支援課で事務のほうを若干手伝わさせていただいております。本日は中島様、おめでとうございます。今後ともご協力くださいますようよろしくお願いいたします。

三好…ありがとうございます。もう一方、伊藤綾子さんです。

伊藤…皆さん、こんにちは。東亜同文書院大学記念センターで働いております伊藤と申します。若干名、顔を知っている方もいらっしゃると思いますが、ほとんど知らない方たちばかりです。私は2016年に縁あって愛知大学で働くことになりました、東亜同文書院大学記念センターで事務を担当しております。本日は会場にもいらっしゃっております森さんと少々かぶりながら、森さんがいなくなった後を引き継いでおります。普段は愛知大学記

念館、皆さんご存知かと思えますけれども、そちらの事務室で働いております。毎日、藤田先生と顔を合わせて他愛のない話から歴史の話、深いところまで色々なことを教えていただきながら仕事をしております。あとは田辺豊橋研究支援課長や三好センター長と連携をとりながら仕事をしております。今日の封筒の中に基金会ニュースの最新号が入っていると思いますが、本日受賞されました中島寛司さんのご協力をいただきました。編集して出来上がったものです。その他、三好センター長から先ほどご紹介があつたと思えますが、今年度の『記念報』を作成している真最中でございます。出来上がりましたら皆さんに送付致しますので楽しみにしてください。また、私は武井さんとも一緒に仕事をしております、武井さんがいなくなることで、もの凄く不安がありますが、武井さんがいなくなってもスムーズに仕事ができる様、一生懸命努力してまいりたいと思えます。今日はこういったかたちでお会いでき、これからも関わりができると思います。その節には皆様のご指導、ご支援を受けることになると思います。不慣れで申し訳ございませんが、今後ともどうぞよろしくお願い致します。

三好…ありがとうございます。皆さんがセンターに電話をかけますと、彼女が大体対応をしておりますが、初めて顔と名前が一致し

たという方もいらつしやるかと思えます。お見知りおきください。

センターの関係者、最後に豊橋研究支援課長の田辺さんをお願いしたいと思えます。

田辺…改めまして皆さん、お世話になります。昨年は3月28日にこの会を開催させていただきました。当日はスタッフが武井さんと二人しか来れなかつた状況でした。今年は皆さんと今後の繋がりを深めたいということで関係スタッフと参加しております。宜しくお願い致します。今日は資料の中にもう一つ、『大学時報』という印刷物を入れさせていただきました。私大連盟に加盟している大学が載っていますが、旧帝大のほか多くの大学が加盟しています。『大学時報』にはバックナンバーが全てホームページに掲載され大学がどう運営すべきかの特集記事になっています。9月号に「自校史と大学博物館」という特集が組まれました。編集者から電話をいただきまして、ここに記事を書いてくれないかとオファーをいただきましたとても恐縮致しました。愛知大学や東亜同文書院のことを広めるチャンスかなと思ひ、記事を書かせていただきました。この特集は全国で6大学だけです。その中の一つに愛知大学のこと、東亜同文書院のことを紹介できました。お時間のある時にお読みいただけたらと思います。3年前に作った本ですけど『創成期への招待』。これはお渡ししているかと思えますがあら

ためて持つてまいりました。『創立10年のあゆみ』を複製するかたちで文字に落としましてアルバム等々の過去のものも載せて作った冊子でございます。三好センター長、藤田名誉教授がお話しております『記念報』等々や先ほどご紹介した本に関しましても廊下の所に置いてありますので、ご希望があれば見ていただきたいと思います。

私が担当になって8年が終わろうとしています。皆様方、先輩方が頑張られていることを大学がアウトプットして広めていかないとブランドが上がらないということを考えまして、スタッフに無理を言つてやつてもらつてここまでできました。引き続きこれからが大事だと思つていますので皆様にはご支援をいただきたいと思います。よろしくお願い致します。

三好…以上で記念センターからのご挨拶にかえたいと思ひます。最後になりましたけれど、もう一度、中島さん、どうもおめでとうございました。

田辺…ありがとうございます。それでは愛知大学のお話はこれまでとさせていただきます。続きまして霞山会 堀田さんをお願い致します。

堀田…どうも皆様、こんにちは。霞山会主任研究員の堀田でございます。本日は中島寛司

様、東亜同文書院記念基金会の功労賞の受賞
おめでとうございます。中島様とは平素から
霞山会の行事、色々ご支援をいただきまして
私個人的にも愛知大学の卒業生でございま
すので、先日の大倉山の記念館の観梅会、こ
ちらのほうに参加させていただきまして、中
島寛司様や本日いらっしやつていらっしゃる神奈川
支部長様等々皆さんと一緒に大倉山の梅を
見に行ったわけでございます。大倉山の記念
館こちらのほうにも宣伝が入っているので
皆様ご存じかと思うのですが、大倉山の記念
館は元々、大倉精神文化研究所と申しまして
元々、東亜同文書院の出身者である大蔵邦彦
という人が作った記念館が現在は図書館に
なつて記念ホールのようなものとして横浜
市民に親しまれているということございま
す。こういったところにも東亜同文書院の
伝統と愛知大学同窓会の有志の方々の様々
なご紹介があり、中島寛司様を通じて私も霞
山会の人間として参加させていただくとい
うことで東亜同文書院、愛知大学、そしてま



たこの霞山会という二者の非常に強い繋が
りというのを感じる次第でございます。

霞山会からは先ほどの祝辞を申し上げます。
した理事長の池田、常任理事の星、常任理事
の阿部、事務局長の六鹿。事務局長の六鹿は
昨年度まで静岡県立大学で国際関係論の教
授をやつておりました。霞山会にはこういう
学術的なアドバイザーとして色々な支援を
もらうということと専門の職員として入っ
てもらつております。本日は東亜同文書院だ
けではないのですが、中国に関連したシンポ
ジウムやそういうような文化事業を進めて
おります霞山会文化事業部のスタッフが来
ております。昨年もご紹介させていただきま
した倉持、そちらにいる齋藤、古川です。こ
ういう集まりがあると我々も東亜同文書院
について考える機会になつており文化事業
部も側面的なサポートをさせていただいて
います。先ほど理事長の池田から祝辞のなか
で申し上げたのですが、6月に開催する愛知
大学と共催のシンポジウムについて紹介さ
せていただきます。

池田・池田でございます。一点だけ申し上げ
たいと思います。先ほどもありましたが、愛
知大学と霞山会は色々な意味で伝統的に極
めて近いところにあります。合同でシンポジ
ウムをやつたということはまだないもので
すから、一度愛知大学の名古屋キャンパスを
お借りして、そこで合同シンポジウムを行お

うではないかということに関係者が考えま
した。一枚のチラシがお手元の資料の中に入
つているかと思えます。6月8日に愛知大学
名古屋キャンパスでシンポジウムを行うと
いうことでございます。報告者の中には栗田
先生、松本先生、嵯峨先生、それから愛知大
学からは藤田先生と三好先生のお二人が登
壇されるということになっております。関心
のおありの方は是非お越しただければと
いうように考えております。テーマは「日中
関係の未来図〜歴史から考える〜」。色々な
角度から日本、中国の日中関係の未来像とい
うテーマにして歴史から考えるということ
で、相当広範なテーマになると思います。ご
関心がむけばお越しいただけるかというよ
うに希望しております。ありがとうございます。

堀田・6月8日の土曜日、愛知大学名古屋キ
ャンパスでの開催でございます。皆様もしご
都合よろしければご出席いただければと思
います。本日、私のほうからもう一点だけ愛
知大学とこの霞山会、また東亜同文書院を繋
ぐ関係ということと申し上げたいと思いま
す。愛知大学同窓会の岡山支部の有森さんが
お作りになった資料ではないかと思うので
すが、京都の若王子というところに荒尾精の
顕彰碑が建つてございます。若王子神社の敷
地内にあるのですが、元々はこれ根津一の私
有地に建てられたという経緯がございます。



霞山会、愛知大学共催

Think Asia—アジア理解講座シンポジウム

日中関係の未来図

—歴史から考える—

- ・2019年6月8日(土)
- ・受付開始12:30 シンポジウム開始13:30 終了18:30 入場無料
- ・愛知大学名古屋キャンパス 講義棟11階L-1103(名古屋市中村区平池町4-60-6)

「歴史とは何か?」という問いに、かつて著名な歴史学者は「過去と現在の対話である」と答えた。また、ある政治学者は、「自然科学のように材料を持たない社会科学、人文科学の分野において歴史こそが材料である」と論じた。どちらも、歴史が現在を考えるうえでのヒントを与えてくれるという意味であろう。しかし、より正確に言うならば「歴史とは過去と現在と未来の対話である」。現在を生きる我々は、過去を学ぶことによって、未来を考えるよすがとしなければならぬ。

孫文、李大釗、荒尾精、米内山庸夫、東亜同文書院の学生たち。彼らは皆、19世紀から20世紀前半にかけての激動のなかにあつて、日本あるいは中国に関する広範な知識を武器に、「日本と中国の間」という難問に逃げることなく向かい合い、未来における日中のありうべき姿を模索した人々であった。日本と中国の狭間で彼らはいったい何を学び、何を考え、何に苦しみ、そして何を未来に残そうとしたのか? 彼らの軌跡をたどることは、取りも直さず、我々にとっての日中間の未来を模索することに他ならない。

プログラム

開会挨拶 池田維(霞山会理事長 元外務省アジア局長)

開会挨拶 川井伸一(愛知大学学長)

特別講演 松本盛雄(霞山会評議員 元駐瀋陽総領事)

「日中関係—理想と現実」

報告 嵯峨隆(静岡県立大学名誉教授)

「1910年代におけるアジア主義の諸相—日本・孫文・李大釗」

栗田尚弥(國學院大學講師)

「米内山庸夫の中国論—汪兆銘政権反対に至る道」

藤田佳久(愛知大学名誉教授)

「荒尾精と日清貿易研究所」

三好章(愛知大学現代中国学部教授 東亜同文書院大学記念センター長)

「戦前中国調査における東亜同文書院」

総括 伊豆見元(霞山会評議員 愛知大学理事評議員 東京国際大学国際戦略研究所教授)

閉会挨拶 星博人(霞山会常任理事)

申込 事前申込

件名を「愛大シンポジウム」として、氏名、連絡先住所、

電話番号を明記して下記までお申込ください。

E-Mail:koudoku@kazankai.org

電話:03-5575-6301 FAX:03-5575-6306

会費 無料

問い合わせ 一般財団法人霞山会 文化事業部 〒107-0052 東京都港区赤坂2-17-47 赤坂霞山ビル1階

電話:03-5575-6301 FAX:03-5575-6306

霞山会、愛知大学 共催 Think Asia—アジア理解講座シンポジウム 日中関係の未来図—歴史から考える—



日時 2019年6月8日(土) 13:30～ ※途中入場 途中退出可
会場 愛知大学名古屋校舎 講義棟 11階 L-1103 教室

【開会挨拶】	【特別講演】	【報告 ①】	【報告 ②】
13:35 - 14:10	14:15 - 14:35	14:40 - 15:00	15:05 - 15:25
池田維 (霞山会理事長、元外務省アジア局長、元駐オランダ特命全権大使、元駐ブラジル特命全権大使、交流協会台北事務所元代表(駐台湾大使に相当)) 川井伸一 (愛知大学学長・理事長)	日中関係—理想と現実 松本盛雄 (霞山会評議員、元駐瀋陽総領事、元駐ハブアニューキニア特命全権大使)	1910年代におけるアジア主義の諸相—日本・孫文・李大釗 嵯峨隆 (静岡県立大学名誉教授)	米内山庸夫の中国論—汪兆銘政権反対に至る道 栗田尚弥 (國學院大学講師)
休憩 20分			
【報告 ③】	【報告 ④】	【総括・質疑応答】	【閉会挨拶】
15:45 - 16:05	16:10 - 16:30	16:45 - 17:50	17:55 - 18:05
荒尾精と日清貿易研究所 藤田佳久 (愛知大学名誉教授、愛知大学東亜同文書院大学記念センター初代センター長、日本沙漠緑化実践協会会長)	戦前中国調査における東亜同文書院 三好章 (愛知大学教授、愛知大学東亜同文書院大学記念センター長)	休憩 15分 伊豆見元 (霞山会評議員、愛知大学理事・評議員、東京国際大学教授)	星博人 (霞山会常任理事、丸紅(株)元上海支店長、元駐中国総代表代行兼北京支店長)

霞山会は、近衛篤磨公[雅号：霞山]が設立した東亜同文会の資産を継承して1948年に誕生した(当時の名称は霞山俱樂部)。一方、東亜同文会が上海で運営していた東亜同文書院大学は敗戦により閉校やむなきに至り、その学生・教員の「受け皿」とすべく関係者によって愛知大学が設立された。東亜同文会の理事であり、新生愛知大学の初代学長となった林毅陸氏は、新団体・新大学への資産継承手続きで清算人代表を務めた。また、愛知大学の理事には霞山会を代表として近衛通隆氏が永年にわたり就任した。霞山会が受け継いだ東亜同文会本部「霞山会館」は1961年に老朽化により取り壊された後、1964年に竣工した霞山ビルの9階に開設され、2007年には地域再開発にともなって建設された霞が関コモンゲート西館の37階に移転し、現在に至っている。同37階には愛知大学東京霞が関オフィスも入居する。

霞山会と愛知大学は現在も東亜同文書院記念基金を共同で運営するなど関係は深い。また愛知大学豊橋図書館に所蔵されている近現代中国に関する貴重な書籍を含む霞山文庫(約35,000冊)は、霞山会から譲渡された東亜同文会本部の旧蔵書であり、愛知大学設立の礎にもなった。

このように霞山会と愛知大学は、1898年に設立された東亜同文会と、1901年に上海で開学した東亜同文書院を共通の歴史的ベースとして、互いに関係をもちつつ発展の道をたどっている。

愛知大学記念館

世紀を跨ぐ大学の伝承 **東亜同文書院 45年 愛知大学 72年**



愛知大学記念館
愛知大学東亜同文書院大学記念センター
【開館時間】 10時～16時
【閉館日】 日・月・祝日
大学が定める休日
入館無料・自由見学

愛知大学記念館 検索



根津家の方がその後相続されました、最終的には滙友会のほうに譲渡され、それをまた現在の霞山会に所有権が移転しまして、現在霞山会が所有、管理するというかたちで荒尾精の記念碑が京都の若王子神社に建てられています。若王子神社の顕彰碑前で昨年の9月24日に荒尾精の追悼祭を藤田先生の積極的な提唱もいただき開催することができました。こちらは現在も霞山会が管理しているということ、尚且つそれを愛知大学同窓会の関西の京都や大阪支部、その他西日本支部の方々が熱心に後押しし、それを藤田先生がお声かけして中島寛司さんに来ていただいたのです。愛知大学も霞山会も愛知大学同窓会も別々の組織ではございますが、現在でも活動を通じて様々な積極的な協力を行っているわけでございます。

この東亜同文書院記念基金会という行事が現在この愛知大学と霞山会、そしてまた東亜同文書院にとってはおかたして上海に向かう学生たちが最初に集う霞山会館があったまさにこの土地でこういう行事が行われているということに非常に歴史的な意味を感じます。そして必ずしもそのような歴史、過去にだけ留まっているのではなく現在もまた共に前進し続けているということをつけ加えて、霞山会からのご挨拶を終えさせていただきます。どうもありがとうございます。



田辺：ご歓談中、皆さんお疲れ様でございます。東亜同文書院、愛知大学の卒業生の皆様からお話をいただきました。思っております。いつものごとく今回の受賞者であります中島さんをお願いをしたいと思います。

中島：それでは司会を私のほうで受けて、皆さんに色々なお話を伺いたいと思います。今日の立場からあまり出しゃばつてもいかんと思つてやりにくいですが、皆さん、こういう機会に色々な意見交換もできたらと思つています。

私は霞山会や基金会や大学の同窓会そういったものの絆を深めてその中でお互いに学び合える機会ができればと思つておりますので、そういう会になるようによろしくお願いいたしますと思つています。順序不同になりますが同窓会の関東支部の、4つの支部があります。そちらのほうの支部長さんに今やろうとしているとか、考えているとか、そんなことを一言ずつお願いしたいと思います。それでは、村尾さんからお願ひします。

村尾：千葉支部の村尾です。本日は中島先輩には東亜同文書院記念基金会の功労賞受賞おめでとうございます。このような晴れがましい席でご指名をいただいて大変恐縮し緊張しておりますが、一言お喜びを申し上げたいと思つています。先ほどの授賞式で川井基金会会長兼愛知大学長、そして霞山会の池田理事長

からご祝辞があり、特に名誉教授の藤田先生からこの功労賞推薦の理由等について詳しくご紹介がありました。中島先輩とは、同窓会活動を通じて長らくお付き合いをいただいております。お話を聞きながら初めて知ったこともあるのですが、全体としてはその通りであると思いつながら拝聴しておりました。そして、言うまでもないことですが、けれども愛知大学は東亜同文書院大学の本間学長はじめとして書院の教職員十数名が設立し、そしてその開学当時の学生の4割近くが同文書院の引き揚げ学生であったということもあって東亜同文書院は愛大の前身校であるという位置付けられております。同窓会においても書院の同窓会は滬友会がやっているわけですが、滬友会主催の賀詞交歓会に愛大の同窓会の関係者が出席するなど以前から交流があったようです。2001年でしたか書院の創立100周年記念事業の一環として、滬友会が愛大の同窓会に特別会員として正式に



参加することになり、それを受けて会則改正も行われております。こういう中において中島先輩は支部の役員、本部の広報委員会の委員として先ほどご紹介がありました活動等を通じて愛大と書院の架け橋の役割を担っていたのだと思います。そしてそれをもって書院の建学の精神の継承に努めてこられました。申し上げていいのかは迷っているのですが、関東4支部は東京、千葉、埼玉、神奈川です。関東4支部の役員会で3年ほど前に中島先輩のご貢献に対して同窓会本部から表彰してもらいたいということを決めました。中島先輩にその旨伝えたところ、その際には固辞されて実現できなかったわけであります。そういうことで本日この基金会功労賞の受賞を心より喜び申し上げます。中島先輩には今後とも益々お元気に同窓会、ならびに大学発展のためにご尽力いただきたいとお願してお礼の言葉とさせていただきます。ありがとうございます。

中島…ありがとうございます。霞山会の嵯峨先生は工藤さんの紹介を書かれております。一言ご挨拶を兼ねてその経緯をお願いしたいと思います。

嵯峨…静岡県立大学の嵯峨と申します。現職は名誉教授という立場です。霞山会とは随分前から関わっております、人名辞典のキー



ワードの段階から出てきておりましたもう20年近くになります。現在は色々なシンポジウムの報告とか誘いがきております。この度霞山会のご厚意で『東亜』という雑誌に短い文章ですけれども本の紹介をさせていただいています。先ほど藤田先生の紹介された1冊の中に『日中70年、戦争と反日、友好』という本を紹介させていただきました。買っていたことが一番ですけれども、内容だけを知りたい方でしたらこれだけをお読みいただければと思います。かなり好意的に書いてつもりです。愛知大学で開催されるシンポジウムでご厄介になると思います。その時はよろしくお願い致します。ありがとうございます。

中島…ありがとうございます。今の『東亜』の紹介文は要点を非常に上手く紹介されております。工藤さんは41期で、同文書院を卒業されてから書かれております。卒業後は中

国との険しい時代に、向こうの大学で学生を教えて交流が非常に深かったのです。退任しからの学生との関わりも非常に深く、日中友好に大変貢献されました。在学中に大きな怪我をして後遺症で一部不自由な身体になりましたが今もお元気です。しかし、ここまで来るにはちよつと元気がないというところで今日はお休みです。皆さん参考になる本だと思えますのでまた機会があつたらお読みいただきたいと思えます。よろしくお願ひしたいと思えます。それでは同窓会東京支部長の淀野さん、お願ひします。

淀野・東京支部の淀野と申します。私は固い話ができませんで同窓会のために一歩一歩努力してまいりますので先輩方のご協力のほどをよろしくお願ひします。

中島・埼玉支部の中川さん、お願ひします。

中川・埼玉支部の中川と申します。本日は中島さん、おめでとうございます。中島さんには同窓会として感謝、感謝、感謝ですよ。いつも色々なメールをいただいて、大学でこういうシンポジウムがあるとか霞山会でこういうのがあるとか教えていただいています。ただ顔が合うといつもお小言をいただく。それでもお小言いただきながらそれが非常に私ども役に立っているのです。これだけ立派にやっておられる先輩がいらつしやるので、



それを先輩に引き継いでいかなければいけないと私ども関東地区同窓会で話し合い、それを浸透させていくということに非常に努力をしている最中です。先ほどの中島さんのご挨拶の中で、寮歌祭とかあるいは墓参会とか出ていて私どもも積極的に参加して後の方に引き継いでいかななくてはいけないという事は重々分かつてはいます。しかし、それを支部の皆さんに伝えて参加していただくということが年々厳しい状態になっていきます。今こういう先輩方がいらつしやるので、その方たちのお話を聞いて心新たに中島先輩の意思を引き継いで私も同窓会の人もしつかりやっていこうと思っておりますので今後ともご指導のほうよろしくお願ひ致します。

中島・神奈川支部の伊藤さん、お願ひします。

伊藤・神奈川支部長を拝命しております伊藤

と申します。よろしくお願ひ致します。中島先輩、本日は記念基金功労賞を受賞され大変おめでとうございます。書院の今までの中島先輩のご功績からすると受賞はちよつと遅いかと。もつと早くいただいても良かったのではないかなと思つている次第でございます。神奈川支部は大学の事務局から250名ぐらいの名簿をいただいております。ところがハガキ等を出してみるとなかなか連絡がつかないという方も多くて、ここ3年ぐらいで何とかコンタクトがとれているのが120、30というところかなと思えます。その内、支部会費を払つていただく。年間2,000円の支部会費を払つていただいているのは50名強というような実態でございます。そういう中で年に支部として支部総会を除いても3回の事業を行っています。春と秋です。5月と10月に「横浜ことはじめ」と申しまして5人の幹事が神奈川県の名所、旧跡、是非訪ねてほしいなという場所を丹念に見と準備をしまして、冊子も作りました。説明も幹事がするという至れり尽くせりの事業でございます。こちらはリピーターの方が大変多くて毎回30名を超える方が参加しておられます。そして先ほどお話がありましたけれども、2月には観梅会。200本あまりの梅があるのです。「いつまでも家の中に閉じこもつてないでそろそろ外へ皆さん出たつしやい。」ということでお誘いをしていきます。こちらにもやはり30名近くの方がお見

えになります。ありがたいことです。愛知大学同窓会には大きな名古屋支部、豊橋支部、ほか色々な支部がありますが、支部で支部総会を含めて4つの事業をしている支部はそんなにはないのではないかと。つまり神奈川支部は大変頑張っていると自負しております。それなのに本部からの補助金はちよつと少なく、活動に見合うだけの補助金をいただけるとシステムにしていたけると大変ありがたいなど常々思っております。常々思っていることの二つ目が先ほど会費の話をしてしまいましたが、年々高齢者の方が色々な事情で出られなくなっていることで会費も年々少なくなってきています。つまり、若手の方が新しく参加していただけないという実態があります。女性の方も大変少ないです。ですから、何とか本部役員、女性の方を登用するとか年功序列の役員体制ではなくて、むしろ年代別にかたか40代から二人、30代から一人というかたちで役員を選出するような



かたちでできないのかと色々考えてはいます。家族で参加できるような事業、子連れでもできるような事業、あるいは職場の帰り道に寄っていかみきたいな同窓会、そのようなかたちのものができないかなと無い知恵を絞っているところです。中島先輩は、神奈川支部の二代目支部長さんで私、五代目です。今までも色々な意味でお知恵を拝借しておりましたけれど、引き続きお元気でご指導ご鞭撻をいただきますことをお願いしまして挨拶にかえさせていただきます。本日はどうもおめでとうございました。

中島・ありがとうございます。同窓会のはうの内輪の話になってしまいました。同窓会の感想というか、存在意義というのは先ほど川井学長さんが触れました文科省私立大学研究ブランディング事業のような色々なことを実施する中で地域にいて村おこしとか地方創生とか、そういうものに関わっている皆さんが関心を寄せるような活動内容になっていきます。一つお付き合いがほしいと思います。今の大学のホームページには専攻の課程とかその活動、期待する日々みたいなものが入っていますからご覧いただきたいと思えます。それでは、大倉精神文化研究所の平井部長から一言お願いしたいと思います。

平井・大倉精神文化研究所の平井と申します。中島さん、本日はおめでとうございます。う

ちの研究所は先ほどからお話いただきましたように創立者の大倉邦彦が東亜同文書院の3期生の卒業生ということでご縁をいただいています。愛知大学とのご縁というのは本当に細々としたものでしかなかったのですが、中島さんが支部長の時に総会、公開講演会を大倉記念館でさせて欲しいとお話いただいて、それは是非お願いしたいということとでこちらが頭を下げて、来ていただいて以来、毎年総会と講演会をしていただいています。そのことがご縁となって毎年、中島さんに色々なことを教えてもらったりしています。研究を進めていく中で愛知大学や東亜同文書院が心の中でずっと引つかかっている資料に注意がいくようになってきたということと研究成果が少しずつ溜まってきました。そういうことでご縁が深くなり、記念センターの藤田先生もそうですし、それから武井さんにも大変お世話になりました。時々新しい資料が見つかるかと武井さんにメール添付で送ってみたいということでご縁もございました。今年も新しい資料をお渡ししようと思つて1年かけて用意しました。それを一つ、二つ紹介させていただきます。

1971年ですから随分前の話ですけど、『滬友ニュース』が出されていて、その『滬友ニュース』の22号に3期生の市川信也さんという方が原稿を書かれました。その原稿の中に大倉邦彦のことが書いてあって、同期生で市川さんというのは一番年少で身体



も弱くて大変だったけれども、在学中に大倉邦彦から柔道を学び身体が丈夫になったという話を書いてありました。その時はあまり気にしていなかったのですが、よく読んでみると卒業後も2年半稽古を受けたと書いてあるのです。寮で一緒にいて同期で教わっていたというだけでなく、卒業して就職した後も親しい間柄で、大倉は天津の出張所に就職しましたので、多分市川さんも近くにいたのだと思います。2年半仕事をしながら付き合いをしておかげで、自分は84歳の今日まで元気でいられたのだというようなことが『滬友ニュース』の22号に書かれていました。卒業後も付き合いがあつて書院での生活は大きな影響を人生に与えたのだなと思つていたのですが、実は大倉の所蔵していた資料を整理を続けているなかで、昨年一冊の写真集が見つかりました。それは天津武術会柔道部というところが明治42年に出版した写真集でして、その中に大倉邦彦の写真も載つていま

した。残念ながら市川さんの写真はなかったのですが、大学を卒業して天津の小さな会社に就職して仕事をしながら天津の武術会の柔道部に所属して柔道を続けていたというのが写真集の本から分かりました。多分、市川さんと卒業後も柔道の練習をしていたと思われまふ。大倉は亡くなるまでずっとその写真集を大事に持つており、学校で学んだことも、書院で学んだことが大倉の人生の中であっても重要だったのだろうなというのがこの一冊の写真集から分かりました。この写真集をうちの研究員が見つ付けてくれたのですが、手が震えるような思いでした。この話を是非今日ここでしたいとコピーを持つて参りました。後で武井さんにコピーを渡して帰りたいなと思つています。今NHKのいだてんが放映されていますけれども、大倉は嘉納治五郎の弟子というか、講道館の柔道の4段を持つていまして、講道館の役員もしていたりしたので嘉納治五郎と縁が深く、オリンピックで柔道が日本のお家芸となるというのは柔道が世界に広まつていくということと、その時に講道館から外国に柔道の師範を派遣するといふのを大倉が嘉納治五郎にお願ひして、自分のところの講道館の弟子を派遣したと。それは戦前の話ですけれどインドからネパールのほうとかぐるつと回つて更には戦後も世界中を回つて英語で柔道教本を書いてそれが今でも使われており、そういう活動でオリンピックに柔道が採用されてお

家芸になつていくといふようなことにも繋がつていく。その大本のところ東亜同文書院の在学中に柔道に励んでいた大倉の姿というのが思い浮かべられたかなと思つています。こんな話を今日お伝えしたいと思つてお時間をいただきました。ありがとうございます。

中島：ありがとうございます。ご案内のように同文書院の皆さんの活動の中から色々な角度から色々な人の色々な事業を顕彰しているといふことについて非常に興味がわくと思つてます。具体的なものについては色々な書簡を見て皆さんで確認をしたいと思つてます。

それでは、栗田尚弥先生、お願いできますか。栗田先生は先ほどの霞山会の紹介にあつた名古屋校舎で開催される6月8日のシンポジウムに講師として講演をいただきます。栗田先生は90年代からの同文書院について、その時代の時代背景について、色々なお話をしてくれまふ。今日はよろしくお願ひします。

栗田：中島さん、どうもおめでたうございませう。受賞された方が司会をされるというパーティーは初めてです。中島先生と申し上げないといけないのですけれども、もう20何年間お付き合いをいただいておりますので、中島さんという言い方にさせていただきます。中島さんは凄く愛校心の強い方だと思つていま

霞山会のことでも同文書院のことでも、お名前のせいではないと思いますけれど、幹事役をされて本当に立派なことだと思います。本当に頭が下がる思いでございます。

先ほど川井学長からお話がありましたように非常に色々なことに関心の深い方であらうと思います。文化であるとか歴史であるとか、特に歴史に関しては色々関心が深い。これは中島さんのパーソナリティーかなと思っていたわけでございます。今日皆様のお話を聞いて、やっぱり愛知大学という大学の存在とは切っても離せない。要するに、私が申し上げた中島さんの色々なことについてはやっぱり愛知大学の出身ということが大きなきんぱくトになっていていかないかかと存じます。その関係で言いますと愛知大学が注目し設置した現代中国学部は画期的な学部だと思えます。例えば、国際政治を考えるときに中国政治史とか中国経済史という科目がございますが、現代中国学部は総体として中国を捉える発想のもとでは単に政治とか経済だけではなく文化とか精神とかそういうものの価値を捉えなければいけない。これは中国のみならず色々な国際関係を考える場合、日本は外交とか政治とかその面だけを捉えがちなのですが、文化とか精神とかそういうものを踏まえないと国家と国家の関係が上手くいかないのではないかと感じいたします。中島先生からご紹介いただきましたように6月に愛大で報告させ

ていただきますけれども、そこで僕は戦前の書院出身の外交官、米内山庸夫という当時の日本国の外交官ですが、外交官でありながらその当時の日本の対中国政策を批判したわけですが、結果としてクビになってしまったのですが、彼の論理は、決して反体制というのではありません。彼は同文書院で過ごし中国の文化とか、詩とか自然科学まで造詣の深い方なのでですね。その観点から見て日本の対中政策は失敗するっていうことをおっしゃったわけですが、これが当たるところです。単に目の前の利益を引き出せばいい、とかそういう問題ではなくて全体的に見た場合、総体として関係を考えた場合、中国との関係はどうなのか、他との関係はどうなるのか、ということをお考えしていた。そういう意味で愛知大学の現代中国学部は総体として中国を捉えるという発想、非常に敬意を払って拝見しております。

中島さんは歴史にももの凄いい造詣が深いのですが、愛知大学の歴史、東亜同文書院からの歴史というものを考えになつていて。私は去年も申し上げたと思うのですが、歴史を考えないところに未来はないということ。「日本人は歴史を考えない」ということを言われ、私はカチンとくるのですが、反面、ある程度認めざるを得ないというところがあるのです。最近どこの国とは申し上げませんが、とある国と非常に関係がぎくしゃくしている。ある新聞で拝見したところ、その国の



研究者の方が善意で日本とその国がこういう状況にあるのは良くないという立場からおっしゃっているわけなのですが、その中で日本は法を重んじる国である、要するに法が表に出る。それに対してその国は正義が表に出る。ここの違いを認識しなければいけない。自分たちが正しいということではなくて、その違いから認識しなければいけないというところをおっしゃられています。私はそれより前からちよつと違うなと思ったのは、その方のおっしゃる正義というのは歴史から来たところの正義なので、過去の歴史を見たときに日本は正義に反していて、そこら辺はやっぱり考えないといけない。私は決して日本の過去が正しいと申し上げるつもりではないのですが、そういうことを言われれば反論できない。ところがきちんと歴史というところを研究していけば、日本は問題はあるけれども、あなたの方のおっしゃる正義というのは本当の正義ですか、100%正義です

か、日本に言い分はないのですか、ということとをきちんと歴史を勉強していけば反論ができる。これは単に弁護するということではなくて、将来の日本とその国の関係の未来を考える上でもの凄く役に立つのです。その意味で一度考えなければいけない。今歴史を重視している愛知大学東亜同文書院大学記念センターに私は期待しております。そしてまた歴史とか色々な知識をもたれている中島さんに敬意を表します。今回はどうもおめでとうございます。

中島・非常に内容の濃い示唆に富んだお話でした。ありがとうございます。現代中国語学部に対する期待が大きいとのこと、三好先生よろしく願います。中国との歴史を色々見たときに、同文書院の方がその時その時に大きな役割を果たしているということ垣間聞くわけです。例えば、外務省にいた岩井英一さん。通称、岩井公館とか言われて後輩の小泉清一さんも該当していたと。その時に蒋介石側と毛沢東、共産党側の間に入っている岩井公館の方がどっちの味方をしてどっちの政策を支援したのかどうか、というようなことは遠藤誉さんの著書『毛沢東』の中に色々書いてあります。それが本当なのか事実だろうか辺りについては、また関係者の皆さんから色々なご意見を聞きたいと思っております。同文書院ができて愛知大学が生まれる時に文部省の認可を得るときに条件が

あり、その時に本が必要であったわけですから、そこで霞山会からたくさんの本が寄贈されました。豊橋の図書館に霞山文庫として保管してあります。その同じフロアの中に空調を利かしたかたちだと思えますけども、大旅行の旅行誌や報告書があります。皆さん機会がありましたら見ていただくといいかと思えます。国立国会図書館元館長の大滝則忠さん、最近の状況を一言お願いできますか。

大滝・皆様、こんにちは。1年ぶりにお会いしますが、皆さん非常にお元気で何よりだと思います。何よりも中島先輩、おめでとうございます。私は愛知大学、東亜同文書院記念基金会、同窓会に関わらせていただいたのは3年前ぐらいになりますが、その度に温かく迎えていただき、くつろいで参加させていただいております。

一つご報告ですが、私は東京オリンピックのときに、東京の教育大学に入りました時に本間喜一先生に保証人になっていただいたところからの本間喜一先生とのご縁であります。我が山形県の川西町に愛知大学の先輩の越知専さんから今回5000万円という多額の奨学金をいただいで、愛知大学進学を後押ししていただくということをお受けして、町では大変多額のご寄付をありがたく喜んでおります。町長は、今日は参加していただきので代わりに御礼を申し上げますと思います。それから、先ほど川井学長さんから

文科省私立大学研究ブランディング事業に採択され20大学の中に入ったとのこと。これは大変な難関を通されたということでおめでとうございます。実は私、去年から大東文化学園の理事をやっております、大東文化大学ですが、これも今回20大学の中に入れてもらい、その経過を知り、本当に難関で、心からお祝い申し上げます。

本日、貴重な時間をいただいて三つだけご報告、その後の経過報告等を申し上げますと思います。一つは私がここにお世話になるのは本間喜一先生の関係する書簡、様々な文書が2016年の夏に藤田先生にも調査に参加いただいで地元川西町から出てきました。それは本間先生の実家、小池家からではなく、というのも本間喜一先生のお父さんという方は、明治の末年から10年前ぐらいに東京の高等師範を卒業された方です。その方が叔父さんであり本間喜一先生を11歳の時に東京に呼び寄せて養育されました。そして学者に育てたという方なのですが、その方の文書が出てきて、現在それを東京の武蔵大学にあります武蔵学園記念室でお預かりいただいております。私は1週間に1回、2年半通っておりますから、昨日までに124回通ったことになりました。あと50回以上、100回になるかもしれません。2年ぐらいはかかりそうです。今日は武蔵学園記念室の室長さんにもお出でいただいでこの雰囲気味わっていただいております。後で一言ご挨拶いただければ

ばと思います。そのことが一つ。今回ご報告したいのは、その膨大な資料12箱の自分の個別化が終わりまして、その資料の数は12,400点あります。昨日までで9,400点の整理が終わっております。データの打ち込みは3分の2が終わり、残り3分の1が終わるのまでにあと2年かかるというところですね。その中に本間先生の一生が表れる資料が次々とでてまいりまして、現時点で400点以上を重ねております。その中で、今回一つだけご紹介したいと思つて準備をしてきました。明治36年2月6日付けの義理の父親の本間熊吉宅、呼び寄せたお家なのですが、そこからの手紙の中に本間喜一、当時11歳の少年を東京に呼び寄せる契機となった手紙です。本間熊吉はその当時、高等師範を卒業して文部省の普通事務局の第一課長をやっております。「私は元来、学問で世を渡るつもりで37歳です。なかなか学問で世を渡れる見込みがつかず実に残念。喜一がいるので



養育して私の志を継がせ、これには十分学問をさせてやりたい。」というようなことが書かれています。そういうふうに通うぐらい37歳で老いぼれてきたと言っています。小池の兄に相談したら、それなら任せよ、その志を継がしてやろうと承諾があつたので今回東京に上京させて早稲田中学に入りたいと手紙で書いております。喜一も上京して修行がしたいといつて喜んでいるとのこと。11歳の本間喜一です。早稲田中学に入るために明治36年2月6日の手紙なのですが、その後3月16日に上野に到着します。上野に到着した時は義理の親の奥さんと自分の親の熊吉さんと一緒に上京されたようです。明治34年、2年前に汽車が通つていきますので、汽車で上野まで着けたと思えます。そういうようなことがありまして、東京に出てきてからは大成中学に。現在の三鷹にあります。当時は神田の三崎町にありまして第一高等学校なんかの受験率としても非常に成果を集めた中学に入つて、その後、第四中学。今の戸山高校に転学して第一高等学校へ2月6日に山形の実家にいる自分の両親に宛てた手紙に喜一を工学士として育てたい。つまり、文士が入っていないところが色々あれですけども、本間喜一として大成したスタートとなる手紙が発見され現在数えることとしては400通。おそらく450通以上と思われれます。それらを現在、武蔵学園で整理をしており、2年後にはこれらの整理が終わります。では

なぜ武蔵学園との関係があるかと言うと、本間の親は根津嘉一郎との縁があつて、根津嘉一郎が大正11年に旧制武蔵高等学校を建てるときに文部省の役員としてそれを一切仕切つたのが本間喜一先生の親御さんであつたのです。武蔵とのご縁で武蔵にお預かりいただいているのですが、今後500通に近いものを是非、愛知大学で扱っていただいて本間喜一先生の明らかになつた人生をより豊かに作り上げ記録にしていただければ幸いです。だなどと考えております。藤田先生に益々お元気にご指導をいただき、完成させていただけます。たいというところをお話させていただけます。ダンボール12箱が山形から出てきた時、これをどういふふうにするかと。ボランティアでそれをやる人がいなければ駄目だろうということ、武蔵学園にお願いすることになったのです。1週間に1回行くにしてもその場がなければとても今までの成果ができなかつたといえます。

畑野・皆様、はじめまして。武蔵学園の記念室の室長をしております畑野と申します。中島様、大変おめでとうございます。その席に呼ばれることになつた経緯とか本間喜一氏の養父にあたられる本間則忠氏の資料の保管のこと、それから今後の展望について少しお話をさせていただければと思います。大滝先生がすべて詳細に話をされてしまいましたので私から特に新たに申し上げられるこ



うことで皆様方のご協力ご支援を是非よろしくお願いしたいと思えます。本日はありがとうございました。

中島…ありがとうございます。それではあと2、3年ぐらいに色々な資料が提供され、愛知大学との関わりが増々深まると思えます。どうぞよろしくお願いしたいと思えます。それから、本間先生のお話が出ましたけども、山形県川西町が故郷になるわけです。愛知大学と川西町とは協定を結んでおります。色々な行事を通して愛知大学の地域政策、その他の応援によって川西町が増々栄えるということでお話したいと思うわけです。今の本間先生の実家は小池という姓で、養子に行かれてこういうかたちになったということですから、これも一つの愛知大学の大きな歴史の柱になると思えます。それでは最後に小川さんお願い致します。

とはそうそうないのですけれども、今そういった整理作業をしております。本間則忠氏、本間喜一氏の親子の色々関係する文書、政界財界それから教育界とか名だたる方々とのやりとりであるとか、そういったものを今まで全然知られていなかったようなことを発掘できたという思いであります。2年ぐらい経ちましたら整理が終わりましてある程度の概要が判明するかと思えます。その時には、武蔵学園の記念室、愛知大学東亜同文書院大学記念センター様の設備とかスタッフとかの陣容と比べますと大変貧弱でございますが、この記念室におきまして何らかのシンポジウムであったり、あるいは記念展などを開催させていただければと思えます。そして最終的には先ほどの大滝先生のお話にもありましたように本間文書の中でも特に愛知大学に関わりの深いものなどを是非とも収めさせていただければと考えております。今の段階からでございますが、勝手なお願いとい

小川…ご指名で一言ご挨拶申し上げます。寛ちゃん、おめでとうございます。馴れ馴れしく寛ちゃんとおっしゃってましたが、私どもは昭和29年に愛知大学へ入った第9期生です。卒業も昭和33年。二人の間では、彼は私のことを悟さんと言いますし、私は寛ちゃんと言っております。色々なことを話したいのですが、直近のニュースとして、今日のインターネットを朝あけましたら建築界のノーベル賞受賞者が決まったと。その賞はプリツカー賞と

いう名称で、建築界ではノーベル賞ものなものです。今まで8人が受賞し、今年の受賞者に磯崎新さん。この名前を聞いた時、あの建築家だというふう思う人は大勢いらっしゃると思えます。我々と結びつきがあるのは、このお父さんが磯崎操次さんという人で同文書院の19期の人なのです。当時、同文書院専門学校に3年間在籍し、3年が終わって慶應大学に入学して故郷の大分へ行つて大分貨物自動車という大きな地域産業ですが、大きな会社を作った人です。その息子さん磯崎新さんで今日受賞されました。これは他の人はあまり関心ないでしょうけれど、愛知大学の関係者は是非覚えていたいただきたいと思えます。

私は同文書院について中島さんほどの関心、行動はありませんけれど、最近中島さん以上に頑張つてやっていると気がするのです。その中に何かがあるかと言いますと東亜同文書院を卒業した人がその後、社会でどのような活躍をしたか、これを拾い上げていけるのです。今の段階で書院の卒業生4,900人とか5,000人と言いますが、1,654人、この人の名前は何期の誰だと言うと色々な書類から拾いまして、その人はその後どんなかたちで社会で活躍していたかというのを先月の末までにまとめました。そうしますと素晴らしい人がこんなにいるのかと。私がまとめたものは教育会、学会、こういうジャンルが一つ。外交の世界、ジャー

ナリストです。ジャーナリストではポーン賞というのを受け取ったのは日本では9人いるのですが、その内の4人が東亜同文書院のOBです。そこで、いくつかのジャンルに分けてまして中心人物を拾いますと1,600人のうち二百数十人と出てきました。そういうことをまとめたのを藤田先生にお出ししておりますので、いつかお披露目ができれば大変幸いかなと思っております。

皆様が色々な角度でお話をなさいましたが、藤田先生が話された中島さんが今度表彰される理由9項目のメモのうち、7番目についてお話しします。

日本寮歌振興会が主催する寮歌祭に参加する経緯について秋山征士さんという第41期の方だと思えますが、この人の愛知大学に対する紹介文が日本寮歌振興会の首脳部を動かしたのだという話がありました。この辺りのことももう少し掘り下げて皆さんにご紹介したいと思えます。日本寮歌祭というのは、昔の旧制高等学校。現在の高等学校は4,800とか5,000と言われますが、当時は33校しかなかったのです。旧制高等学校は、第一高等学校から第八までのナンバースクールは八つ。名古屋は第八高等学校で最後です。さらに北は弘前から南は九州の第七高等学校まで25校。足して33校です。この学校のOBが参加しているのが日本寮歌振興会。その他に旧制大学、予科と称するのが50校あったのです。33の高等学校と旧制高等学校、予

科。愛知大学は50の大学予科の最後の学校で日本寮歌祭、参加資格があったのです。実はこのことを本間喜一先生が昭和61年の5月9日、確かそんなふうにしり上げられたと記憶しております。当時、学長は95歳。昭和61年で95歳は本間に長命です。本間先生が「私の最後の願いは愛知大学の卒業生が日比谷の公会堂で愛知大学の寮歌を歌ってほしいんだ。」「東亜同文書院の皆さんはそこに参加して歌ってらんだぞ。」というようなお話をしておっしゃいました。それを聞いた愛知大学同窓会東京支部の当時の谷藤助、浅井琢朗、OBの先輩方です。本間先生のおっしゃるような日比谷の日本寮歌祭の際には是非参加しようじゃないかというので一生懸命活動して参加しました。その時に非常に運命的なことがあったのですが、神津助太郎という人がいました。この人は南京同文書院の第1期生、23人の内の一人なのです。この神津さんの親戚の方が当時の日本寮歌振興会のボスであり長年の後継者であって、その人との触れ合いがあつて、その時に愛知大学も参加したいと申し上げたところ、神津さんはうちの親戚の神津助太郎が世話になった大学じゃないかと。それは一も二もなく参加ウエルカムということで参加することになりました。7人の子持ちで4男3女ですが、最後の子どもが神津善行。中村メイコの旦那さんです。そういう縁がありまして、人生色々なところに色々な縁があつてこういう結果が出るのだなと

思っています。いつも寮歌を歌う時には本間喜一先生の一声がこういう結果を生んだと。さらに申し上げますと、現在の日本寮歌振興会の会長は園部逸夫さんという人です。このお父さんが園部敏さんで、愛知大学ができた時の法学部の教授として台北帝国大学から参加していただいた。そういう意味で一つの縁がありまして、現在の日本寮歌振興会の園部会長もまた縁がある。そのような繋がりがあつて愛大OBの高井和伸さんが現在の日本寮歌振興会の会長さんを補佐する副会長として日本寮歌振興会を盛り上げていますわけです。人生はほんとにどこで縁があるのか分かりません。そのような思いを持って今から愛知大学の寮歌を歌いたいと思えます。ありがとうございます。





本間先生欽慕の会

平成30年5月12日(土) 東京小平霊園

写真お名前 (敬称略)

- | | | |
|-------|-------|------|
| 関口忠彦 | 森 健一 | 中島寛司 |
| 高橋光子 | | |
| 後藤卓也 | 本間万里子 | |
| 殿岡晟子 | | |
| 中山 弘 | 夏目益良 | 小川 悟 |
| 荒尾初雄 | 岩間 毅 | |
| 南 昌彦 | 越智 専 | |
| 飯塚 啓 | | |
| 高井和伸 | 藤田佳久 | |
| 山田晃司 | 小川千尋 | |
| | | 鳥越 剛 |
| 杉浦福夫 | 岩城龍夫 | |
| 伊藤登美夫 | 近藤智彦 | |
| 淀野敏男 | | |
| 守能伸幸 | | |



根津山洲先生墓参 桜花忌

平成30年4月7日(土) 横浜の鶴見総持寺

鶴見の総持寺墓前に参り、献花 焼香礼拝のあと、院歌 長江の水 を献じ、またお隣の水野梅暁氏の墓前にも献花、焼香の礼を献じました。
 総持寺境内の桜は例年より早く、満開は過ぎてしまいましたが桜花の風情は残っていました。心配した雨天の気配もなく墓参日和も幸いでした。
 参加者：齋藤真苗 倉持由美子 星原大輔
 越智専 越智ツヤ子 小崎昌業 熊谷範一郎 平井誠二 藤田佳久 中島寛司 (高井和伸) [敬称略]



根津山洲先生墓参 梅花忌
平成30年2月18日(水) 京都伏見の月橋院

参加者20名が合い寄り、清掃を行い献花 合掌礼拝を行いました。午後には月橋院本堂に根津先生の御影を掲げ門主様のお經に合わせながら般若心経を唱え順次お焼香を行いました。小春日和の晴天に恵まれ梅花忌に相応しい日と成りました。

参加者：藤田佳久 馬場毅 近藤智彦 的場正治 加藤正人 松浦信義 高力賢一 木下史子 渡部幸代、野田牧郎 滝下隆夫 松山哲彦 岡崎早苗 竹本陽三 小西一英 出原元 三上洋三 有森茂生 (加藤大策) [敬称略]



荒尾東方齋先生墓参
平成29年10月27日(土) 東京谷中の全生庵

全生庵・荒尾先覚の墓前に10名が参集、献花 焼香 拝礼のあと書院寮歌『長江の水』愛知大学逍遙歌『月影砕くる』を献歌斉唱。本堂正面の階段にて恒例の写真撮影(写真上)と今年は山岡鉄舟の墓前でも記念写真を撮影いたしました。

庫裏に移動して御齋会 淀野東京支部長の音頭で献杯。和やかな歓談が続きました。

参加者：熊谷範一郎 藤田佳久 齋藤真苗 倉持由美子 小川千尋 堀田幸裕 淀野敏男 高井和伸 小川悟 中島寛司 [敬称略]

東亜同文書院大学記念 センター活動レポート

① 岡崎展示会・講演会を開催

東亜同文書院大学記念センターは、「東亜同文書院の45年、愛知大学の70年」をテーマに出張展示会・講演会を過去17回、日本各地及びシカゴにて開催しております。

今回は地元岡崎にて新たなテーマ「上海と東亜同文書院大学、愛知大学」を開催することができました。

展示会では上海及び東亜同文書院の写真をパネルにて紹介し、東亜同文書院が上海にあった背景をDVD等で紹介しました。

講演会では、石田卓生本学非常勤講師が「上海の東亜同文書院とその歴史マップ」を、藤田名誉教授が「上海を日本人に初めて切り拓いた青年藩士たちと岸田吟香」を講演しました。さらに、現代中国学部卒業生で名鉄観光サービス株式会社名鉄国際貨物カンパニー名古屋国際貨物支店勤務の野口晃太郎さんが、上海に赴任した2年間に現地で実際に経験を感じた内容を、現代中国学部4年生の岡本大空さんがインターンシップを通して学んだことと現地のお薦めの商品などの画像を利用して紹介し、いずれの講演も好評にて終了することができました。同窓生、一般の方を含め80名以上の方が参加され、3日間で合計300名を越える来館者が立ち寄られました。

なお、6月30日の中日新聞朝刊に紹介されました。「愛知大学」、そのルーツ校の「東亜同文書院」、そして今回のテーマである「上海」とのつながりを知っていただき、117年を数える大学史とその背景を知ることにより本学を更に知っていただく機会ができたと思います。



上海

と東亜同文書院大学・愛知大学

岡崎展示会・講演会

展示会：2018年6月29日(金)～7月1日(日)
10:00～18:00
講演会：2018年7月1日(日)
13:00～16:30

予約不要・入場無料・入退場自由

展示会

愛知大学記念館(裏面参照)にて所蔵している貴重なコレクションを出展展示します。更に1901年から半世紀の上海および東亜同文書院、1946年創立以来の愛知大学を紹介する特別展示を行います。ぜひお越しください。

講演会

- ・「上海の東亜同文書院とその歴史マップ」
石田 卓生 (愛知大学非常勤講師、東亜同文書院大学記念センター研究員)
- ・「上海を日本人に初めて切り拓いた青年藩士たちと岸田吟香」
藤田 佳久 (愛知大学名誉教授、元東亜同文書院大学記念センター長)
- ・「いま、上海ではたらくー愛大で学んだことー」
野口 晃太郎 (愛知大学現代中国学部卒業生、名鉄観光サービス株式会社)
- ・「学主が見た上海ー中国現地インターンシップを通してー」愛知大学現代中国学部生

図書館交流プラザ Libraホール

〒444-0059
愛知県岡崎市康生通西
4丁目71番地


名鉄名古屋本線東岡崎駅より
【徒歩】北西へ徒歩約20分
【バス】名鉄バス
新岡崎駅東口バス(岡崎駅・市民病院線)
日名明行バス(魚沼・康生町経由)で
『図書館交流プラザ』バス停下車



主催
・愛知大学東亜同文書院大学
記念センター
・愛知大学現代中国学部

後援
・一般財団法人藤山会
・愛知大学同窓会
・公益財団法人愛知大学教育
研究支援財団

 愛知大学
AICHI UNIVERSITY
Q 愛知大学東亜 検索




石田卓生

1973年岐阜県生まれ。愛知大学・豊橋創造大学非常勤講師、愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員、博士(中国研究)。専門領域：近現代日中間関係史、中国語教育史、近現代中国文学。

講演時間：7月1日(日) 13:05～13:50

目まぐるしく変化する中国最大の経済都市上海。そこには、かつて愛知大学の前身校である東亜同文書院(1901～1945年)がありました。本報告は、豊富な写真を用いて戦前当時と現在の姿を対照させながら、東亜同文書院の足跡を辿ります。



藤田佳久

1940年愛知県生まれ。名古屋大学院修士、博士課程で地理学を専攻。理学博士。愛知大学東亜同文書院大学記念センターセンター長を歴任。愛知大学名誉教授。日本砂漠学会常任幹事。

講演時間：7月1日(日) 13:50～14:45

上海が日本人に知られる契機となったのは、幕府船番船で訪れた青年藩士や、ヘボンのお伴をして日英辞書の印刷に同行した岸田吟香によるもので、折しも上海は太平天国の乱中でありました。彼らはそのような中で急速に変化する上海をどのように見ていたのでしょうか。東亜同文書院が上海を辿った経緯にも迫ってみたい。



野口晃太郎

1986年愛知県生まれ。2011年愛知大学現代中国学部卒業。大学在学中に北京語言大学へ1年間の交換留学をし、現地研究調査に参加。名鉄観光サービス株式会社名鉄国際貨物カンパニー名古屋国際貨物支店勤務。

講演時間：7月1日(日) 15:00～

私は、愛知大学2年時に天津での中国現地プログラム(4ヶ月)、3年時に杭州での現地研究調査を、4年時に北京での交換留学(1年間)をし、中国で過ごす大学生活でした。そして学生時代から目標としてきた海外駐在を昨年6月までの約2年間上海にて経験しました。自身が就いて、思ったことをお話ししたいと思います。

【展示会感想】

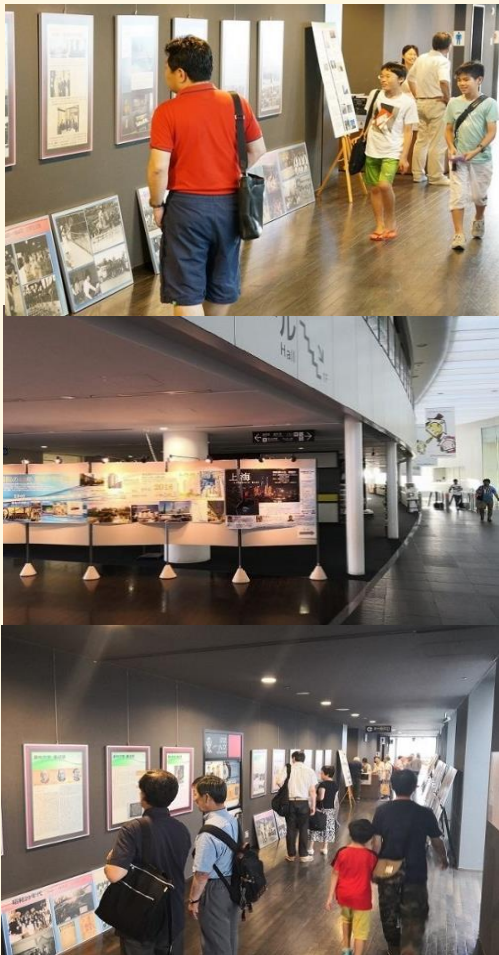
- ・愛知大学の歴史をみて、中国との関わりを知りました。
- ・そんな昔から交流があったんですね。歴史がある愛知大学なのだと感じました。
- ・写真入りの説明でわかりやすかったです。
- ・本当にいい展示会でした。展示会場に流されていた動画もわかりやすく、詳しくかったです。中国出身ですが同文書院大学の歴史は知らなかったです。近代史の流れにこういう学生が文化交流を取り組む姿を見ると、とても感動しました。これからもいろいろ勉強しつづけ、日中関係の懸け橋になればいいと心から思っています。
- ・興味深く拝見させていただきました。100年以上前の日本人の見識の高さに感銘いたします。
- ・愛知大学は中国とかなり深いかわりを持っていた。早くからこのような関係を築いたからこそこうして中国との友好のあかしを作っていると思いました。

【講演会感想】

- ・藤田講演は興味深く、若い人の話も興味深く感じました。今後も若い人を加えた講演会を企画してください。
- ・歴史上日本と中国はつながりが深く国対国も大切だが、やはり人間対人間のつながりが一番大切であると思いました。
- ・上海での創成期の様子を知ることができました。東亜同文書院の4つの校舎とも上海中心部から離れており、教育環境のことも考慮されたということをよく理解できました。
- ・上海の街の発展がよくわかりました。石田講演の当時と現在の街の様子の写真での対比に興味をもちました。
- ・野口講演で、海外で働くことの意味がわかりました。これからの時代のグローバル化に合わせて頑張らなければならないと感じました。
- ・とても楽しく話を聞かせていただきました。私も20年ほど前に北京に留学していたので、話の内容がとても懐かしく感覚的にもすごく理解

できました。

- ・講演された現代中国学部OBの野口氏が卒業後も中国に駐在し活躍され、とてもうらやましく思いました。しかし、仕事で中国を関わることはとても大変なことだと思うので、苦勞もひとしおだと思えます。
- ・現代中国学部卒業生の野口氏のユニークな喋りと話題が非常に興味を待ちました。よく中国をとらえていると思いました。
- ・岡本講演で、上海の食べ物事情まで様々なことがわかりました。海外現地インタースHIPの大切さがわかりました。
- ・現在の上海の事を写真も交えて楽しく話していただき、とても興味深かったです。クリームチーズ入りのドリンクに（中国人は列に並ばないと思ってるのに）2時間並ぶという話は衝撃的でした。食べる分だけレストランで頼むようにというのも同じくらいビックリです。
- ・若く、柔軟な学生の将来を頼もしく思います。



②愛知大学史シリーズ第1回 愛知大学の学風と学長の政治への姿勢〜林毅陸初代学長、そして本間喜一学長から久曾神昇学長まで〜を開催

東亜同文書院大学記念センターは「東亜同文書院から愛知大学へ」を主眼に調査研究を進めています。両者の接合部分の解明にも関係する「愛知大学史シリーズ」第一回講演会を2018年11月23日(祝・金)に豊橋キャンパス本館5階の第3、4会議室にて開催しました。

講師は坂井達朗氏。同氏はかつて愛知大学文学部(社会学)に昭和43年から13年間、助手、専任講師、助教として務められました。折しも全国的な学園紛争の時代も体験されています。その後、慶應義塾大学文学部へ転任され同大教授となり、さらに慶應義塾福澤研究センターの所長を歴任されました。現在は慶應義塾大学名誉教授で、福澤諭吉協会の理事なども務められています。

講演の中心は坂井氏の愛知大学での体験をふまえ、関連史料や文献も多用し、林毅陸初代愛知大学学長(元慶應義塾塾長兼大学総長)について詳細な話をなさいました。会場は満席に埋まり、初めて拝聴する林初代学長の軌跡に参加者のアンケートは大変好評であり、創成期の愛知大学の原点に顧みる良い機会となりました。



③名誉博士 平松礼二画伯特別展覧会を開催

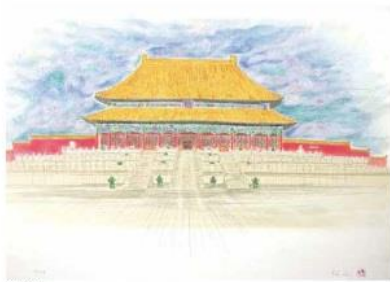
第2回名誉博士 平松礼二画伯特別展覧会を11月17日〜24日の8日間、大学記念館2階にて開催しました。

11月23日(祝・金)に、平松礼二画伯による講演会「ジャポニスム2018―日本・フランス友好160周年―」を開催し、さらに展覧会場では、学生対象や一般の方への平松礼二画伯によるガイドツアーを11月23、24日に4回開催しました。また、同日はJRさわやかウォーキングのコースとなったことから1000名を超す多くの方々の観覧があり、8日間で合計2420名の来館者となりました。

展覧会作品は平松礼二画伯自ら厳選されたもので、日本各地、東海地方、フランス・ジャポニスム、「文藝春秋」の表紙画など多彩な作品を公開しました。また、NHK、Eテレ「日曜美術館」を別室にて上映し、毎回満席になるほど多くの方々が見入っておられました。

第2回 名誉博士 平松礼二画伯特別展覧会

2018年11月17日(土)〜24日(土) 10:00〜18:00
(前夜・休日は休館) 入場無料
愛知大学 豊橋キャンパス 愛知大学記念館
主催:愛知大学 協賛:愛知大学同窓会・(公財)愛知大学教育研究支援財団



愛知大学
AICHI UNIVERSITY



【来館者の感想】

- ・ 素晴らしいの一言。美術館などと違い雰囲気も良く楽しかったです。見ごたえのある作品ばかりで、本物の持つダイナミックさ、また繊細さも感じられました。
- ・ 今回2回目ですが、何度見ても素晴らしいと思います。「文藝春秋」の表紙もあれだけの大きさのものとは思いませんでした。毎回大変な作業だったと思います。動画NHKの番組も良かったです。
- ・ とても満足しています。絵の世界と植物（花）の自然の美しさに改めて感動し、日々を大切にしようと思いました。とても良い展覧会ありがとうございました。今まで美術館で見たイメージと違って、部屋に入っただけに楽しめました。
- ・ 平松画伯の色彩と発想が独特で魅力的です。
- ・ 『文芸春秋』の表紙の本物を見ることができて嬉しく思う反面、本を持参すればよかったと後悔もしましたが、元中日劇場の緞帳を見ることもできたので良かったです。
- ・ 去年、初めて展示会を見て中日劇場の緞帳が大学記念館に展示してあると知り嬉しく思いました。以前から緞帳の行方が気になっていたので、愛名古屋校舎と豊橋校舎に展示されていることを嬉しく思います。笹島の校舎は近いうちに行きたいと思っています。
- ・ 素晴らしい絵をたくさん見せて頂き、ありがとうございます。ビデオも見て、絵のことが良く分かり、感激しました。「文藝春秋」の表紙絵、見たことのある風景が多々あり、嬉しかったです。
- ・ 同窓の先輩として前より注目しています。毎朝のコーヒーは、平松さんの桜花をプリントしたカップで、飲む度に思いをはせています。大好きな絵です。
- ・ 見どころの多い作品が多いと感じました。久しぶりに母校を訪問するきっかけとなりました。今後も質の良い展覧会の開催をお願いいたします。良い作品を見させていただきました。

④ JRさわやかウォーキングを開催

2018年11月23日(祝・金) JR東海主催のJRさわやかウォーキング「芸術と食欲の秋 日本画家平松礼二の作品展開催中の愛知大学記念館、豊橋自慢の新米を召し上げ」が開催されました。愛知大学記念館がゴール地点となる、コース距離5.7km所要時間1時間40分のウォーキングコースには、愛知大学公館がコースポイントに初めて選ばれました。

昨年度は名古屋鉄道が主催し豊橋鉄道が共催した「名鉄ハイキング」を実施されましたが、「JRさわやかウォーキング」は2015、2016年度に続く3回目となりました。参加者は総勢1536名、うち大学記念館に1491名の来館がありました。

同日は大学記念館2階にて「第2回 名誉博士 平松礼二画伯特別展覧会」を開催し、さらに平松画伯がデザインした旧中日劇場緞帳(縦9.5m×横21.33m、重量1トン)のタペストリー(縦1.5m×横4m重量40.45kg)を初お披露目しました。築110年の大学記念館、創立73年を誇る愛知大学の歴史に加え、卒業生である平松画伯の芸術をたっぷりお見せすることができました。今後も愛知大学の魅力を体感していただける企画を大学記念館にて開催していきます。

【ウォーキングコース「芸術と食欲の秋 日本画家平松礼二の作品展開催中の愛知大学記念館、豊橋自慢の新米を召し上げ」】

豊橋駅↓東三河食糧(株)(女神のほほえみ)↓愛知大学公館↓諏訪神社
↓愛知大学記念館↓豊橋鉄道・愛知大学前駅



さわやかウォーキングとは

TOP
参加方法
参加賞品
ウォーキング豆知識
注意事項
便利グッズ

2018年11月23日(祝)

芸術と食欲の秋 日本画家平松礼二の作品展開催中の愛知大学記念館、豊橋自慢の新米を召し上げ

スタート駅：東海道線 豊橋駅

コース距離	所要時間	スタート受付時間	コースマップ 準備中
約5.7km	約1時間40分	8:30~11:00	

スタート

豊橋駅

東三河食糧(株)
(女神のほほえみ)

愛知大学公館

諏訪神社

愛知大学記念館

ゴール

豊橋鉄道・愛知大学前駅





愛知大学は1946年に中部地方において、初めての法文系大学として愛知県豊橋市に誕生しました。その前身は、第二次世界大戦前、海外にあった日本の高等教育機関であり、とりわけ中国の上海にあった東亜同文書院(のちに大学)が中心と言えます。

東亜同文書院大学記念センターは、1993年に設立して以来、本学の「生みの親」ともいえる東亜同文書院大学の総合的研究と、書院を継承した愛知大学史の研究を進めており、その成果はシンポジウムや紀要、ブックレットにて発表してきました。

文部科学省の研究プロジェクト「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」の採択後も、①「近代アジアにおける東亜同文書院および東亜同文書の展開と機能に関する研究」、②「東亜同文書院を軸とした外地からの引揚げ総合大学として創立した愛知大学とその特性に関する研究」を中心に研究を促進しています。

研究活動のほか、センターがある大学記念館には、本学の歴史やコレクションを紹介する展示室があり、「大学史」の授業にも利用しています。来館者数は年間5000名を超え、本学学生のほか、高校生や国内外からの研究者など、広く来館いただいています。来館者の中には史料を寄贈して下さる方もおられ、整理・保存活動も行っています。

センター事業に賛同をいただだけ、東亜同文書院大学・愛知大学に関する資料等を提供いただける方は、当センターまでご連絡ください。よう、お願いいたします。

大学記念館／東亜同文書院大学記念センター
連絡先 0532-4714139
開館時間 10時～16時(土曜日は12時まで)
休館日 日・祝日・大学が定める休日

国際シンポジウム

- 2016年 「東亜同文書院卒業生たちの軌跡を追う」
- 2015年 「近代日中関係史の中のアジア主義-東亜同文書院と東亜同文会-」
- 2014年 「東亜同文書院の中国研究-その現代的意味」
- 2013年 「近代日中関係史の中の東亜同文書院」
「孫文と東アジアの平和」
- 2012年 「近代台湾の経済社会変遷-日本とのかわりをめぐって-」
- 2011年 「辛亥革命・孫文・東亜同文会」
- 2010年 「戦前外地にあった愛大ルーツ5校の出身学生が語るアジアと愛大」
- 2009年 「戦前研究者から見た東亜同文書院」
- 2008年 「東亜同文会の東アジアにおける教育活動とその展開」
- 2007年 「日中研究者による東亜同文書院研究」
「世界と日本の大学史の流れの中での東亜同文書院と愛知大学」

展示会・講演会

2019年	高松	2010年	名古屋
2018年	岡崎	2010年	米沢
2017年	浜松	2010年	京都
2016年	名古屋	2009年	神戸
2015年	松本	2009年	シカゴ
2014年	広島	2008年	福岡
2014年	岐阜	2008年	弘前
2013年	岐阜	2007年	東京
2012年	沖繩	2006年	横浜
2011年	富山		

出版物

- ・同文書院記念報 (vol.27まで刊行)
- ・ブックレット(第9巻まで刊行)
- ・愛知大学創成期の群像 など



愛知大学記念館

愛知大学東亜同文書院大学記念センター

